



聖徒の道

11 1980



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト

顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア
レックス・D・ピネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー
F・エンツィオ・ブッシュ

国際機関誌

編集主幹：
ラリー・A・ヒラー
編集副主幹：
キャロル・モーゼス
子供の頁編集：
ハイデイ・ホルフェルツ
デザイナー：
ロジャー・ギリング

も く じ

主に忠誠を尽くしなさい……………スペンサー・W・キンボール………… 1
 今日の扶助協会……………バーバラ・B・スミス………… 4
 勝利の喜び……………ハートマン・レクター・ジュニア…………11
 書物があるはずだと……………ジュディス・タナリー・ロイズ…………14
 思いました
 奇跡の1マイル……………サラ・ブラウン・ニールソン…………16
 特別な家庭のタバ……………F・バートン・ハワード…………21
 エリザベスにやってきた……………ナンシー・ガーバー…………24
 エリザベス
 おもちゃばこ…………………………28
 どの家族にも良いホーム……………ジョン・D・ウェッテン…………29
 ティーチャーが必要である
 グアテマラの伝道談……………リン・ティルトン…………33
 あかり……………ウェス・スティープソン…………40
 心を落ちつけて祈る……………エイプリル・ホーマン…………42
 ローカル・ニュース…………………………44

表紙の説明

1977年12月17日、グアテマラのチュラックで最初にバプテスマを受けた兄弟たち（コーデル・M・アンダーセン撮影）

聖徒の道11月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30
印刷所 株式会社 精興社
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19
定 価 年間予約1,700円 1部150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0518 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512
口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

主に忠誠を 尽くしなさい

大管長

スパンサー・W・キンボール



誠 実さ（自らの信条ならびに誓約を實踐する意志、能力）は、高潔な人格を築く上で礎のひとつとなるものである。高潔な人格を築かなければ、現世にあっても永遠においても神の臨在を望むことはできない。私たちは自らの意に反することを行なって自身の誠実さを傷つけてはならない。

自分の交わした誓約を軽んじれば永遠の自分自身を傷つけることになる。私は熟慮の上で誓約という言葉を使っている。それは、誓約という言葉が神聖な意味を含んだ言葉だからである。したがって、私はでき

る限りその言葉のもつ特別な靈的影響力をもって誓約という言葉を使うつもりである。自分の言動を正当化することは容易であり、そのためについ心が動かされるが、主は近代の啓示の中で次のように説いておられる。「もし己が罪を蔽いかくさんとし、われらの高慢、空しき野望を充たさんと企て……んとする時は、……諸天は退き去り、主の『みたま』悲しむ。……その人……独り置かるままにとげあるむちをけり……。」（教義と聖約121：37—38）

もちろん私たちには自由意志が与えられ

ているので、自分で選択することができる。しかし選択の結果から逃れることはできない。もし私たちに誠実でない点があるとなれば、悪魔はそこを集中的に攻撃する。

私は皆さんに確信をもって申し上げる。教会の標準は、道徳的行為に関するものも服装や身なりに関するものも、すべてが教会指導者の真剣な祈りと熟慮の結果生まれたものである。すっきりと品のよい格好をした若人を見ると、彼らが、世の流行一下品で乱れている場合が多い—を追う必要は自分たちにはないと感じていることがわかる。男女の区別のつかない格好に流れるという道徳上破滅的な傾向に屈しないという若人たちは、快活で、規則正しい生活を送り、神と同胞に仕えるべく能力の向上に専心している人々である。

シェイクスピアは、ポローニアスにのみじくもこう言わせている。「衣裳というものは往々着る人の人柄を表わすものじゃ」（ハムレット、第1幕第3場、三神 勲訳）私たちは着ている衣服に影響される。つまり服装に合った行動を取る傾向がある。私たちは晴れ着を着た時にばか騒ぎをする気にはならないし、仕事着を着れば仕事をする気になる。また慎みのない服装をすれば慎みのない行動に誘われ、男性が女性（その逆についても言える）のような服装をすれば自分が男であるという意識、すなわち男女の永遠の使命を区別する特性がどこか失われていく。ところで誤解のないように願っているが、私は、人を外見で判断するようには言っているのではない。人を外の姿で判断するのは愚かで、望ましくないことである。私が言っているのは、服装や身なりと人の感情、行動には関係があるということである。私たちは標準への完全な服従

を主張することによって、兄弟姉妹に対して排他的になってはならない。標準を知らない人や理解していない人もいるからである。私たちはそのような人々を悪いとして退けたりとがめたりするべきではなく、むしろもっと愛を示さなければならない。そうすることによって私たちは、誓約に反した場合、それが自分自身にとってどれほど危険であり、また自分が忠誠を尽くさなければならないはずの理想に対してどれほど害になるか、じっくりと理解させることができるからである。時々、標準を無視した人々を見かけるが、私たちはそれが単なる不注意であって故意でないことを願っている。

私たちの目標は、完全になることである。しかし私たち全員にとって完全への道はまだまだ遠い。常に誠実であり、みたまを受けて生活するように努めなさい。すべての戒めを守りなさい。そうすればいつの日か神のみ前にとがなく立てるであろう。自分の歩んできた道を喜びをもって眺められるように、今年も来年もその翌年も、毎年主にあなたの信仰と忠誠を尽くしなさい。

主に対する忠誠は、主の選ばれた指導者への忠誠をも意味する。この時満ちたる神権時代において、その子供たちを導くべく主から召された人々は確かに神の靈感を受けている。私の祖父は最初の十二使徒定員会の一員であったし、父は今日とは比較にならないほど少人数だった教会において、伝道部長ならびにステーキ部長として5人の大管長の下で働いた。私自身も61年間をステーキ部役員ならびに教会幹部として仕えてきた。祖父、父、そして私の3人の生活は、回復された教会の歩みと共にあると言ってもよく、総合すれば、私たち父子三代は教会が回復されて以来の教会幹部のほと

んど全員を多少なりとも個人的に知っていることになる。このことを根拠に私は皆さんに申し上げる。教会指導者たちは天与の偉大な才能に恵まれた人々であったが、それをも超えた素晴らしい働きを示した人々であった、と。彼らにそれができたのは、主がそのみ業を行なうための力を彼らに与えられたからである。

ところで、私は主が指導者に影響を与えられることについて述べているが、これは、私とその家庭に立ち寄り、証を聞き、立派な働きと無私の奉仕を目にしてきた無数の他の指導者にも言える。そのような姿から私が学んだことは、祈りの心があり、義を渴望し、罪を捨て、神の戒めに従順である人には、主はますます豊かに光を注がれ、ついには天の幕を貫いて人知の及ばないことを知る力を授けられるということである。そしてこのような高潔な人には、主のみ顔を拝し、主の存在を知るといふ金銭では買うことのできない約束が与えられている(教義と聖約93:1 参照)。

私たちはしばしば、教会幹部に対して特別な歓待の気持ちを示す。これは正しいことである。なぜなら、教会幹部がその召しを全うできるよう、彼らのために祈る義務が私たちすべてにあるからである。しかし私は、どのような召しであれ主から与えられた召しを全力を尽くして遂行するすべての人を、その生活や業績において際立った人々とまったく同様に主がお喜びになることを知っている。J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は、率直であるが力強く次のように語っている。「主のみ業に携わる時に大切なのは、あなたが奉仕する役職ではなく、方法である。末日聖徒イエス・キリスト教会においては、正当に召される人の

みが職に就く。職を求める者も辞退する者もない。」(Conference Report「大会報告」1951年4月, p. 154) 実際、クラーク副管長はこの教えを実践された。私はこれまでの生涯私の指導者を支持し、彼らの福利のために祈りを捧げてきた。そして私自身もこの数年の間、聖徒の方々が私のために天に向かって捧げて下さった同様の祈りによって、大きな力が注がれるのを感じてきた。

私は主の忍耐に感謝している。主は私たち人間に多くのものを付与して下さっているが、それに対する返礼はあまり受けておられないように思われる。しかしながら、私たちには悔い改めという希望の原則がある。つまりいた時にはいつでも立ち上がり、自己を磨いてさらに大きな試練に立ち向かうことができるのである。主なるイエス・キリストが癒しの奇跡を行ない、私たちが弱っている時に力を、病気の時には健康を、落胆している時に希望を、空しさを感じている時には愛を、そして真理を求めている時に理解を注いで下さるのは、悔い改めによってである。

何よりも私は、イエス・キリストが私たちの信仰の中心であることを宣言し、イエス・キリストは生きておられることを証する。主はきょうも御自身の教会を導いておられる。そして私たちがへりくだって熱心に、しかも絶えず主のみこころを知るように努める時に、主は私たちの祈りを聞いて下さり、きょうのこの日もまた、奇跡と啓示の日として下さるのである。

このことは、私の父や私自身、また皆さんの父親や皆さん自身が人々にこの福音が真実で、神聖なものであることを教えてきたように、真実であることを証する。

今日の 扶助協会



エンサイン誌記者による
中央扶助協会会長、
バーバラ・B・スミス姉妹との
インタビュー

記者：スミス姉妹、中央扶助協会会長になられて5年以上経ちましたが、姉妹の扶助協会に対する見方はどのように変わりましたか。

スミス姉妹：それについては、ふたつの主立ったことが挙げられます。ひとつは、以前よりももっと扶助協会の目的の偉大さに気づくようになったことです。最初私は、扶助協会が教会の姉妹たちだけに与えられた主からの賜であると考えていました。ですけれども、今は、扶助協会は、世界の至る所に住む主の娘たちのために主が与えて下さったものであることを知っています。また、教会の姉妹が福音の原則を学んで実行する時に、彼女たちは世界中の女性の生活に善い影響を及ぼすことができると確信しています。

予言者ジョセフ・スミスは、姉妹たちに知恵と知識が注がれるように、その扉を開けると宣言しました。私はその時すでに、この選択の時代に耐えられるよう姉妹たちを備え始めていたのではないかと思います。私たちは、昔の人々よりも高い教養を身につけており、必要であれば経済的に独立することもできます。また、選挙権も与えられています。これらの特権は、ある意味で今まで女性が経験し得なかった選択の責任を課すものであり、同時に、種々の機会とチャレンジを提供してくれます。女性が、こうした多数の特権の祝福を手にするようになった時には、日々の生活の環境に対して慎重な目と祈りの心を持って対処し、自由意志を正しく使い、自らの決断に対する責任を受け入れなければなりません。

ふたつ目は、家庭訪問プログラムを前よりもより広い視野に立って見られるよ

うになったことです。かつて私は、家庭訪問プログラムを単に教える経験として考えていたのですが、それは、貧困や教育の欠如、対人問題など扶助協会の中の問題を解決する上で多面にわたって助けとなっていることを実感しています。このプログラムは、姉妹同士の絆を育み、強めるものです。また、扶助協会の会員同士の交わりを支える第一の力です。

記者：その2番目の事柄についてですが、家庭訪問プログラムはどのように社会の問題を解決する助けとなっているとお考えですか。

スミス姉妹：たくさんあります。扶助協会が始まった当初、姉妹たちは世界中から集まった聖徒たちが生活を営めるように、いろいろな手助けをしました。食料や衣類、住居を分かち合ったのです。また西部への移住の際には、夫と一緒に家を建てたり、荒地を開墾したり、また、産業や公共施設の発展にも寄与しました。西部開拓が進むにつれて、必需品の内容も変わってきましたが、扶助協会はその都度それらの要求に応じてきたのです。

今日、私たちは、多くの社会問題を抱えています。いつも何かしら解決しなければならない問題が存在するのは、人類が持って生まれた一種の特質なのかも知れませんね。そういった点から、扶助協会プログラム、特に家庭訪問プログラムが靈感を受けて定められたものであり、現存する多種多様な問題を解決するために与えられていることを日々強く感じるようになってきました。

例えば、私たちのような都会化された社会に住んでいても、孤独という大きな問題があります。この問題に実質的な解

答を与えてくれるのが、一人一人の姉妹に焦点を置く家庭訪問プログラムです。訪問教師の責任を真剣に引き受ける姉妹は、自分に割り当てられた姉妹について知り、キリストのような精神を持って彼女たちに関心を払うよう努力するはずです。そして、孤独にさいなまれている人人を助けるために方法を探し出すことでしょう。また、孤独な人々を励まして他の人々に関心を持つように勧めることもできます。扶助協会のファイルには、他の人々に助けの手を差し伸べることによって自分の問題に対する答えを見いだしたという人々の報告がぎっしりと詰まっています。

訪問教師の援助を必要としている問題がもうひとつあります。貧困の第一の原因は基礎教育の欠如であると言われていますが、扶助協会プログラムには、この問題を解決する上で助けとなるものがいろいろあります。ところが、肝心の助けを必要とする本人が集会に来なかつたり、あるいは来れなかつたりする場合があります。そのような時、家族訪問プログラムを活用すれば、家庭に行ってメッセージを伝え、情報や知識を分かち合い、そして扶助協会のすぐれたプログラムを活用するよう姉妹たちを促すことができます。多くの姉妹たちは、家庭訪問プログラムを通して、扶助協会の正規のレッスン以外に何の学習プログラムもなければ決して得られない教養を身につけてきました。

また毎週の扶助協会クラスでは、続けて教育を受けようとする気持ちが養われます。それは、自己を改善しようとする意欲が育まれるからです。ある80歳



今日、私たちは、多くの社会問題を抱えています。……扶助協会プログラム、特に家庭訪問プログラムが靈感を受けて定められたものであり、現存する多種多様な問題を解決するために与えられていることを日々強く感じるようになってきました。

になる女性は、扶助協会の民族芸術プログラムを通じて強く啓発され、再び大学に戻って修士号を取る決心をしました。また、養老施設に入っている別の姉妹は、扶助協会のチャレンジに応じてテレビの教育講座を勉強するようになったのです。さらに開発途上国で教会員となり、自分は何もできないと感じていた姉妹が、教会内でのいろいろな経験、また扶助協会や訪問教師の励ましを通して読み書きができるようになり、遂には地方の扶助協

会を管理する召しについてという話を聞いたことがあります。

記者：母親が仕事を持つことは現実的な問題となっていますが、それについてはどうお考えですか。

スミス姉妹：母親が働きに出るかどうかの決断は個人的な問題です。夫を亡くしたり離婚したりした母親は、子供たちを養うために働くことを余儀なくされるでしょう。また、ある女性にとってある時期に働くことは正しい選択ですが、他の人々にとってはそうではありません。このように、この選択は簡単にはできません。この問題は、女性が最も慎重に考え、祈らなければならない分野の事柄です。まず第一に、経済的な利益と自分の不在によって生じる悪影響とを比較してみる必要があります。そして、妻、母親としての最も重要な責任を認め、仕事を持った時にそれらの責任はどうなるか自問しなければなりません。あらゆる選択を検討し、その中から自分が最も責任を負っている人々に最大の利益を及ぼせる方を選ぶ必要があります。

キンボール大管長は、1978、79年にソルトレークのタバナクルから放送された女性のファイアサイドで話しをなさいましたが、そのふたつの説教の中でこの事柄に関して勧告を与えています。

すべての女性は、家事、儉約、持てる才能を存分に活かすことなどにおいて技術を向上させる必要があります。女性は家庭作りが上手でなければなりません。どのようにしたら愛の雰囲気をもっと効果的にかもし出すことができるか、夫、子供、自分自身、そして自らが責任を負う人々の成長のために何ができるかを評価

してみることが大切です。また、子供を産み育てるといった重大な時期にあつては、教会には福祉プログラムなどの援助機関が与えられていることを知っておくことも必要です。このようにしていろいろな方面から熱心に考慮した後は、みたまの導きによって自分の立場に最もふさわしい決断を下すのがよいと思います。

記者：女性の責任または役割の重さに耐えかねて疲れきっている人々に対して何かアドバイスがありますか。

スミス姉妹：女性が目標を幾つか立てて優先順位を決め、それらを達成することを日々の生活を通して学ぶことは大切なことです。女性は、自分の優先したものが他の人々のものとは異なることを理解しなければなりません。そうでないと、欲求不満に陥ってしまうでしょう。女性は、自分自身の生活の向上のために努力する必要があると同時に、そのための方法や手段が他の人々のものとは全く同じではないことも知らなければなりません。時時、自分を自分が定めた標準によってではなく他の女性と比較して測ろうとしている女性と話をすることがあります。そのような時、私は彼女たちに、福音の標準に合わせて慎重に自分だけの目標を定め、それを達成し自ら成長することに満足を見いだすようにと勧めるのです。

記者：そうしたもやもやした気持ちをなくす具体的な方法はありますか。

スミス姉妹：まず強調しなければならないのは、健康ですね。睡眠を十分に取る、体操をする、規則正しい食生活をする、これらはいずれも大切なことです。たとえ10分間であっても、昼寝をすることは忙しい女性にとって感情の上で大きな違

いを生じます。

また、健全な精神を築く習慣を身につけなければなりません。キンボール大管長は、日記をつけるという良い提案を与えて下さっています。人生を一日一日の積み重ねとして見るとなかなか変化に気づきにくいのですが、日記は、違った観点を与えてくれます。何週間あるいは何カ月か前を振り返って自分の成し遂げたことを確かめることができますから、効果的な方法だと思います。

また、私たちは自分の限界を知らなければなりません。この世には、だれに対しても完全になれるという人はいません。目標設定の重要性を強調するのはこのためです。私たち一人一人は、人のまねをするよりはむしろ自分に何ができるかを知らなければなりません。

記者：自分自身に関して実際にそのような知識を持つことができない人々にはどのようなアドバイスをなさいますか。どのようにすれば自分を知ることができると思いますか。

スミス姉妹：ぱっとひと言で言えるような方法があればよいと思うのですが、残念ながらそれは私たちがこの地上で自己の成長のために与えられた大きな計画の一部にあたるもので、私たちは、何度も何度も実際に試してみてもなければ学ぶことはできないのです。自信というものは、聖典の勉強、祈り、個人の啓示など霊的成長をもたらす事柄によって身につけるのです。がっかりするようなことがあったから、目標を達成できなかったからと言ってあきらめた気持ちになる必要はありません。私の義理の母親は、自分の成し遂げたいと思っている事柄を大切なも

のから順番に書き出すことを日課として
います。そうすれば、その日にしたことを
素早く評価できるというわけです。母は、
物事を達成することに関しては非常に有
能な人ですが、同時に、自分自身を適確
に理解しています。母は、自分で実際
に行なったこととしなければならなかつ
たことを切り離して考えることができる
のです。

私の好きな言葉のひとつに、ブリガム・
ヤングが人々に教えたものがあります。
「私たちは、サタン力から逃れることは
できない。従って、試され誘惑されるも
のは何かを見極める必要がある。何人
といえども、救い主の生涯に明確に刻み
込まれた原則以外のものでは昇栄するこ
とは不可能である。

私たちの宗教の根本的な原則からすれ
ば、イエス・キリストはよろずの物の下
に身を落とさなければ、すべてのもの
の上に昇ることはおできにならなかった。」

(*Journal of Discourses* 「説教集」 3 :
365)

自分にふりかかった問題を、監督や夫、
子供たちに回してしまうとすれば、それ
こそ女性として、自分自身に限界を設け
てしまうことになります。落胆している
時にこそ感謝してよいはず。落胆の
日々があればこそ幸福な日々が認識でき
るのですから。

記者：不活発、不一致等の問題で苦勞して
いる地方の扶助協会に対しては、どのよ
うな助言をお与えになりますか。

スミス姉妹：私たちは、このような質問を
たくさん受けます。そして、この問題に
対しては、地方の指導者が地元の姉妹た
ちと会って解決策を話し合うことによつ

て答えを得るようにと返答しています。
会員の不活発が問題であれば、教会に来
ない姉妹たちを捜し出して来ない理由を
言ってもらって下さい。来ない理由は、
彼女たちしか知らないのですから。指導
者がひと度彼女たちの話を心から耳を傾
けて聞き、その言葉に應えるならば、解
決の糸口をつかんでも同じことです。地
方の扶助協会は、集会の部屋が美しく整
っていること、レッスンはよく準備され
ていること、温かい雰囲気であること、
愛の精神がみなぎっていること、特に扶
助協会に入ったばかりの人や今まで不活
発であった人々に対しては愛をもって接
すること、などのことが必ず守られてい
るかよく確かめて下さい。

記者：時々、扶助協会会長がある問題を明
らかにしたりそれを神権指導者に知らせ
たりするのをちゅうしょしているように
感じることがありますが、地元の神権指

最初私は、扶助協会が教会の姉妹
たちだけに与えられた主からの賜
であると考えていました。ですが、
今は、扶助協会は、世界の至る所
に住む主の娘たちのために主が与
えて下さったものであることを知
っています。

導者が扶助協会の問題を知らずにいることがままあるのでしょうか。

スミス姉妹：そのことは、時々問題にされることがあります。けれども、扶助協会の責任を持つ私たちが扶助協会の召しに内在する大きな可能性を見落としていることがかなり多くあると思うのです。その召しにこそ私たちが責任を負う管理の職があります。与えられた責任を果たすために、私たちはプログラムと会員一人一人を理解する必要があります。問題が起きた時に、考えられるあらゆる解決方法の一つ一つ丹念に検討してみることが大切です。それらを書き出し、優先順位をつけます。そして、優先順位の高いものから、自分でできることを行なって下さい。そしてもしそれ以上の助けがある時には、問題と考えられる解決策を神権指導者のもとに持っていった一緒に考えてもらおうとよいでしょう。扶助協会の出席する神権評議会も問題を解決し必要を満たす手段となります。扶助協会会長が十分に準備した上で評議会に臨めば、姉妹たちにとって価値ある貢献をすることができます。

記者：物事を決議する上で女性に相当な立場が与えられていると思いますか。

スミス姉妹：はい、そう思います。問題があるとすれば、召しを果たす時に女性がかつと真剣に召しと取り組む必要があるということです。私は、教会幹部の方々がどんなに姉妹たちを気遣って下さっているか知っています。姉妹たちの前途が洋々としたものであることを理解して欲しいと願っておられるのです。

記者：最近、教会の集会プログラムが統合化されましたが、この新しいプログラム

は扶助協会にどのような影響を及ぼしていると思いますか。

スミス姉妹：私のステーキ部は、試験的にこのプログラムを行なったステーキ部のひとつですが、初めて出席した時にひとつの良い効果が得られるのに気づきました。私の隣に年配の姉妹が座っておられたのですが、彼女は私の方を向いて、「若い姉妹たちと一緒に集会に出席できるなんて、本当に素晴らしいことですわ」とうれしそうにおっしゃいました。

若い女性には活気があり、年配の姉妹には知恵があります。両方が一緒になれば、力と分別が調和して素晴らしいものになります。以前のように扶助協会の集会を別々に行っていた時には、そうした調和というものはあまりありませんでした。

記者：この新しいプログラムは、扶助協会に何か違ったチャレンジをもたらすとお考えですか。

スミス姉妹：はい。そのひとつは、時間が限られていることです。現在の扶助協会テキストは、1時間のレッスン用に作成されています。教師が1時間のレッスンを30分でまとめるのはどんなに大変かご想像いただけると思います。その解決策として、ひとつは、姉妹たちが前もってテキストを読み、レッスンの概念について深く考え、そしてクラスでそれらの考えを分かち合うよう計画することです。そうすることによってクラスの親密感を一層高めることができます。

記者：すべての姉妹が扶助協会に出席できるわけではありませんね。中には、若い女性や初等協会、託児で責任を果たさなくてはならない人もいますが。

幸せとは単に楽しいという感情ではなく、多くの場合、勝ち取らなければならない性質のものである。だれもが勝利者足らんと願っている。私もそうである。私は、人が地上にあるのは勝利を得るためであり、主に近く生活するならばそれができると信じている。主が勝利者であられることは明白な事実である。

神との関係を危うくするような誘惑や争いに直面した場合、私たちは負けてはいけない、否、妥協することさえできないとい

う気持ちになる。

しかし問題によってはさほど重要でもなく、どちらに転んでもたいして変わりがなくということもある。アブラハム・リンカーンは、本当に大切なただひとつのものさえ残るなら、ほかのものをすべて敵の手に渡すこともやぶさかではないと述べたと言う。何と賢明な言葉だろうか。

人間の生活は平凡ではあっても互いに影響し合っており、譲歩を余儀なくされることも度々ある。これは共同生活を営む上で



勝利の喜び

七十人第一定員会会員
ハートマン・レクター・ジュニア



必ずつきまとう問題である。いつでも自分の思い通りにというわけにはいかない。

勝つことは確かに大切なことであり、賢明な人は自分の伴侶や子供もそのような気持ちをよく味わうことができるように意を払う。

ある時、4人の子供を持つ若い母親が監督の紹介で私を尋ねて来た。彼女はそのふた月ほど前から夫と別居していた。

どうして別居したかを聞いていく内に、彼女は心から夫を愛し、夫もまた彼女を誠実に愛していたということがはっきりした。しかし彼は妻にあらゆる点で完全さを求めたのである。妻の欠点を赦そうとせず、言い争いになっても絶対に後に引くことがなかった。もし妻に負けそうにでもなると、時には暴力を振るってでも、自分の考えを通そうとしたのである。

私はその夫とも話してみた。彼は2時間かけて自分がどれ程妻を愛しているかを話してくれた。自分が暴力を振るったことを認め、悪いことをして申し訳ないという思いがあった。彼は自分の心の中に悔い改めの気持ちが芽生えてきていることに気づいていた。二度と彼女を虐待するようなことはしないし、やり直しのチャンスを与えて欲しいと願っていたのである。

彼の言葉に偽りはなかっただろう。しかしまだ充分ではなかった。私は、彼は永遠の絆を築く上で欠くことのできない原則に対して、もう少し確固とした決意を持つ必要があると感じた。そして、時にはほかの人に花を持たせることの必要性について話し合った。

彼はいつでも思い通りにしなければ気が済まず、妻が自分の意にそわない行動を取ることには我慢ができなくなるということ

を認めた。私はささいな事柄に逐一向きになる必要はないということをお知らせしようとした。いつも自分が正しいと言い張るよりも、妻の考えに耳を傾ける必要があり、そうすれば互いに満足のいく結果を得、相手の顔を立てることもできたのである。あざけりを受け、粗探しをされるに決まっているという恐れを彼女から取り去って、自分の力で判断できるようにさせてやらなければならないと彼に言うと、彼も努力してみると答えた。

しかしそれは決して簡単なことではなかったと思う。長年にわたって続けてきた行動を一朝一夕に変えることなどできるものではないからである。しかし、このふたりは徐々にではあるが問題を解決していった。

この原則は、十代の子供たちとその両親の関係の良いものとする上でも欠くことのできないものである。

規則によっては、いささかもゆるがせにできないものもあるし、譲歩の余地のない律法もある。それと同時に、さして重要でない事柄もある。私は永遠の行く末を左右するような問題でない限り、子供たちの選択に任せようという思いになってきた。愛と一致、また相互理解の精神を育み、家庭を主イエス・キリストのみたまが豊かに宿る所とするためには、このことが非常に大切である。

例えば、我が家の上の息子たちはあのビートルズ全盛の時代に育ち、流行の最先端を行くファッションにあこがれた。私は一時的な流行は好きではない。それはこれまでもそうであったし、これからも決して変わることはないと思う。しかし、私はたずなを少し緩め、子供たちの望むようにさせた。

なぜそうしたかと言うと、本当に大切な事柄についてはすべて自分の主張を通していたからである。私の子供たちは分類すればいわゆる良い子供たちの部類であったろう。6時25分からの早朝セミナーに通い、教会の数々の集会にも定期的に出席し、自分の一も納め、スカウト活動も普通に行なっていた。また学校の成績も平均よりは上であり、私のホームティーチングの同僚として働くなど神権者としての務めにも忠実で、家庭にあってもその責任をよく果たしていた。

子供たちがしたいと思っていることで、私の考えに合わないことと言えばたったひとつ、流行の服装や身だしなみのことだけであった。しかし私にとって、彼らがしていた正しい、少なくとも満足すべきすべての事柄と比較してみれば、服装の問題はそれ程重要なこととは思えなかった。

この譲歩によって子供たちは墮落しただろうか。そのようなことはなかった。彼らは流行を追いながらも、大切な事柄はすべて果たしていたのである。上のふたりの息子も伝道を終えて数年経つが、今でも宣教師と同じような髪型にしている。

私がなぜそうした流行の点で譲歩したのかと問いただす人がいるかも知れない。いや、実際にそうした疑問を投げかけてきた人がいた。そういう人々にとっては、これは妥協することのできない問題だったのだろう。しかし私はそうは考えなかった。今でもそれに変わりはない。私が言いたいのは、両親は何が本当に大切な問題なのかを見極め、時には子供たちを立ててやることも必要であるということである。

私たち夫婦が子供たちに許している事柄はほかにも幾つかある。夫婦で話し合っ

て、さ程大切でないという結論に達したものである。例えば、だれを友だちにするかとか、自分の家や教会での催しに友だちを招くかとか、学校が休みの前の日の夜ふかし、自分の部屋の飾りつけ、あるいは、流行の服装を身に着けたり（ただし度が過ぎないという条件で）、騒々しい音楽をかけたり、たまには他愛のないことをしたりといったことである。もちろん、子供たちがこういうことを一切しないというのであれば私たち両親にとってそれに越したことはない。それで私たち夫婦は子供たちに、これらのことをする時には自分で責任のとれる限度をわきまえておくように言う。それは、いつもあれやこれやと口うるさく言わなくても済むようにするためである。こういった取るに足らないことで不必要に騒ぎ立てることのないように決めたのである。

私たちは、その気になれば見過ごしにできるささいなことに、始終目くじらを立てているようなことのないようにしなければならない。もし夫婦の間で、相手が自分の思い通りのことをしなかったとしても、それがどうしても譲ることのできない事柄でなければ、大きな気持ちで受け入れようではないか。思いやりのある建設的な言葉を口にし、ほめるようにしようではないか。相手のひとりよがりな態度、次から次と飛んでくる小言、そしり、苦情が原因で無力感や劣等感に捕らわれ、苦々しい思いを抱くようになっていく夫婦があまりにも多い。人を成長させるのは、愛し受け入れようとする気持ちである。

自分の力で成し遂げたという思いはだれにとっても必要である。愛と一致、協調の精神は、私たちすべてをいつかは勝利へと導いてくれるであろう。

私が、アメリカ大陸の原住民に何か宗教書があったに違いないと確信するようになったのは、いつ頃だったのでしょうか。ともかく、何年か宗教を研究した後にそういう信念ができていたのです。

私は幼い頃からプロテスタントの教会に通っていましたが、十代になってから、教えられてきた神というものが復讐心に燃えた憎悪の神のように感じられて、ついてゆけなくなりました。そこで聖書を基にして5年計画で、真理探究の勉強を始めました。聖書なら、真実の教会の主義なり信条なりをはっきり教えていると思ったからです。

「真実の教会の外見や霊的な面の特性は何であるか」という面倒な問題について、地域の図書館で答えが見つかりそうな本をずいぶん調べもしました。この問題はまるで大きなはめ絵のようで、見つけた答えは

書物があるはずだと 思いました

ジュディス・タナリー・ロイズ



皆限りがなく、大きな絵のほんの一部にしかすぎないのです。でもそういう答えのかけらをいろいろ見つけることは私にとって大事なことでした。というのも、真実の教会に行き当たった時、それを見分ける必要があったからです。私は科学や歴史や宗教や超自然的な事物に関心のある人たちを捜して、討論したり一緒に研究したりしました。そのうち、何とはなしに古代文明に心が引かれるようになったのです。中でもエジプトとアメリカ大陸のピラミッドは私の興味をそそりました。マヤ人はどんなふうにして暦を発明したのだろうか。インカ族の起源はどこなのだろう。コロンブスは本当にアメリカ大陸へやって来た最初の人なのだろうか。そのようなことをいろいろ考えました。確かにコロンブスの時代よりもずっと前から旧大陸と新大陸の間で頻繁に行き来が行なわれていたことは、たくさんの証拠が示す通りです。

私は歴史や宗教の古書をいろいろ読んでから、キリストがおいでになったのはユダヤ人の所ばかりではないと考えるようになりました。それに、本当に妙なことなのですが、心を引かれ始めたのが古代アメリカの民族でした。私は次第に「南アメリカの聖書」が存在したはずだと考えるようになりました。それより良い名前が見つからないので勝手に自分でそう呼んだのです。

ところがこの民族の昔の書物はあまり見つけられませんでした。スペイン人がアメリカ原住民を征服した時に、優れた図書は全部焼いてしまったからです。インカ族がコ



ルテスを東方から来るはずの大白神として歓迎したのは一体なぜかということも興味がありました。

5年間にわたる研究も終わる頃、いろいろ調べた結果として真実の教会の原則というものの幾らかが明らかになりました。第一に、その教会では父なる神は愛の神であると教えていること。第二に、聖霊が信仰に積極的にかかわっていること。教会は病人や悩んでいる人を癒すことができること。死後の生命を信じていること。予言の賜を持っていること。黙示録を明快に説明できること。失われた十支族の話信じ、その復帰を待っていること。科学の真理と宗教の真理は互いに補い合うものであると教えていること。他の惑星に生物がいることを信じていること、等々。

また、この頃の私には、聖書に記されていた宗教上の真理の多くが伝承の過程で失われてしまったという確信が心にあって、インカ、マヤ、アステカの文明をもっと探ろうという気になっていました。言語記号の解説さえできれば、真実の宗教を見つける鍵はそこにあると確信していたのです。大勢の学者が何世紀にもわたって研究してきたことに、この私がどんな気持ちで挑戦したのか自分でもわかりませんが、とにかく消滅した言語と古代の言語に関する2冊の本を買い、エジプト象形文字の勉強に取りかかったのです。この時には、すでに私が私を心に留めて下さっていたと思います。

私が自分で「真実の教会」の特性だと思いうことを調べて書き出した頃、ひとりの親

友にその話をするようになりました。彼女に「私の」教会の持つ原則を話すと、彼女は決まって「まあ、それはモルモン教徒が信じていることよ」とか「モルモンの教義に似ているわ」と言うのです。どうしたとか、さんざん調べてきたというのに、モルモンの信仰に一度も出会うことがなかったのです。それから1、2週間後、私は彼女が持っていた「教義と聖約」を借りました。そして、その本を一晚のうちに夢中で読んでしまい、次はジェームズ・E・タルメージ著の「信仰箇条の研究」を読みました。その後私は末日聖徒イエス・キリスト教会に電話をかけ、宣教師を送って下さるようお願いしました。

宣教師の教えは私にとって耳新しいものではありませんでした。それは長年の研究の間に、教えに教えを加えて私が信じるようになった事柄でした。バプテスマの面接をして下さった宣教師がニューファイ第三書の17章を読み、最後に幼な子をキリストが祝福される美しい箇所まで来ると、私は目を涙でうるませ、のどをつまらせながらこう言いました。「確かです。知っております。キリストはアメリカ大陸へいらっしゃいました。」

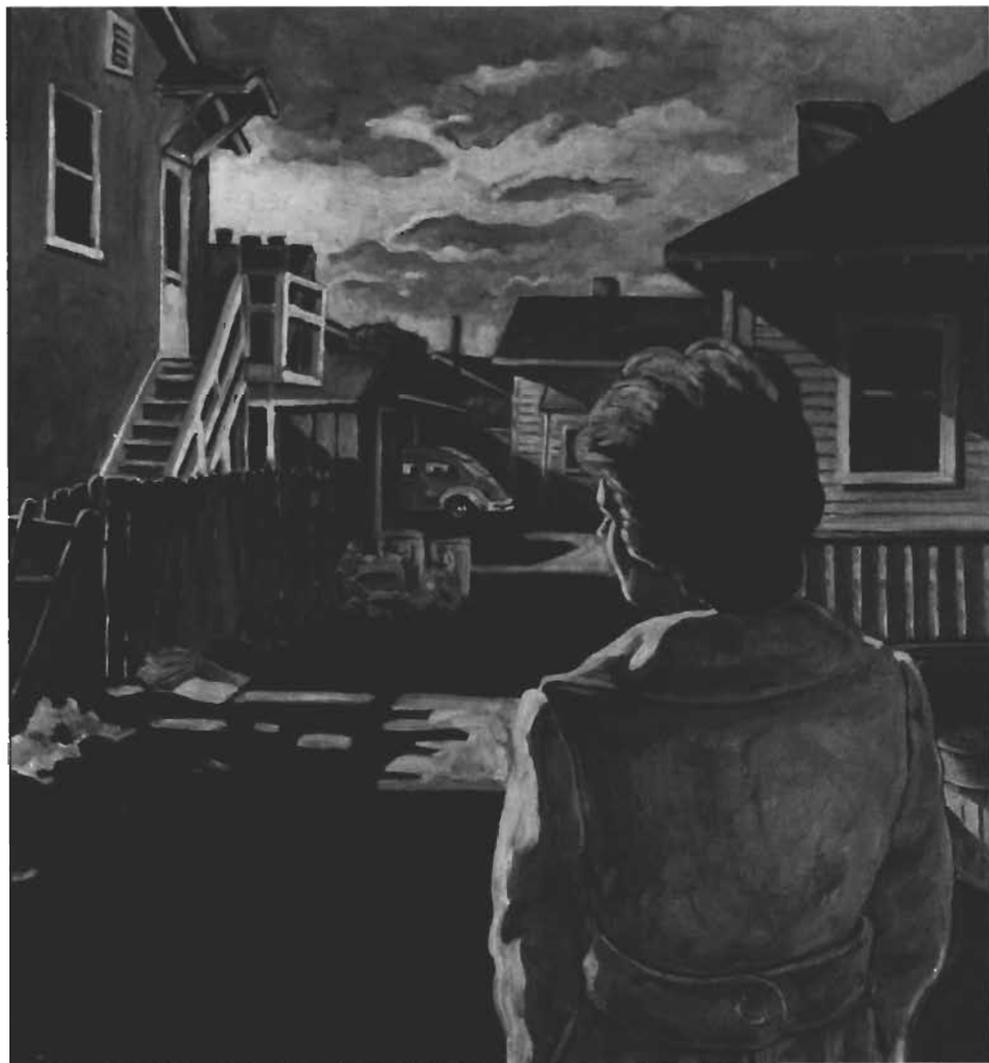
私はとうとう古代の「アメリカの聖書」を発見したのです。

(ジュディス・タナリー・ロイズ 主婦、
4児の母、ヒューストン・テキサス・ノー
スステキー部サイプレスワード部所属)



奇跡の1マイル

サラ・ブラウン・ニールソン



「二 お宅は何度来ても時間の浪費だわ。」
一軒の家の裏に傾きながら立っている小屋のような家。その家の風雨に打たれて色あせた戸をノックしながら、家庭訪問の同僚が言いました。「だれもいらっしやらない。」

力を入れて何度もトントンたたくので、握った手に塗料がはげてついてきます。私は彼女の方を向いてうなずきました。それでも、今晚こそはと望みをかけて、ドアをたたき続けました。しかしその日もいつもと同じでした。私たちはとうとうあきらめて、草ぼうぼうの通路を通りまで引き返しました。

「あーあ、あの方にお会いしようと思っ
て2マイル行ったというのに。……せめて
居所がわかっただけでも大したことよね。」
車に乗りながら私は言いました。

半年前に初めて来た時は、小さな古いその建物が見つからなかったのです。ワード部の境界線が変わって私たちのワード部へ移ってきた家族が何組かあり、この姉妹が私たちの訪問教師の区域に加わったのでした。探し続けた住所が間違っているようだとわかって、2カ所のガソリンスタンドで尋ね、何軒かの家に聞いてから、ようやく雑草に埋もれたあの通路を捜し当てたのです。ところが、せっかく尋ね当てたというのに返事はなく、がっかりしてしまいました。

ジュディ・カーンズ姉妹の情報カードには電話番号が記入されていなかったの
で、電話番号案内で調べてみました。でも、番号簿に載っていないことがわかっただけで

した。ワード部の記録をちょっと見たところでは、3年前にバプテスマを受けて現在は教会に来ておらず、ふたりの幼児を女手ひとつで育てていらっしやるということでした。

私たちは訪問のたびにお電話下さいというメモを残してきたのですが、連絡はありませんでした。玄関先に果物を置いてきたり、週末に立ち寄ってみたりしても、いつも留守でした。

「また骨折り損だったわ。」家に向かって車を走らせながらそう思いましたが、良心は語りかけます。本当に2マイル行っているの？2マイルというのは何？私は気を取り直しました。福音の標準によれば、それはただ責任を果たすことではなく、機会を最大限に生かして良い成果を得るよう心の込められた働きをすることでした。事実私たちは、2マイル目に足を踏み出そうとしたところで、今歩んでいるのは、ほんのわずかな距離に過ぎず、大きく足を踏み出すことがまだまだできるはずでした。

その晩、私は4回電話をかけた末に、ジュディの前のワード部から訪問教師がだれだったかを聞き出しました。はっきりした情報は得られなかったのですが、電話番号だけはわかりました。電話を切ると、ちょっとした興奮に胸が高鳴りました。私はすぐにいそいそとジュディのダイヤルを回しましたが、聞こえてきたのは不在の空しい呼び出し音だけでした。翌日もその夜もまた電話をかけてみましたが、やはり留守でした。

それから数日後の夕方遅く、歯医者での

治療の帰り道、ジュディも帰宅途中かもしれないという考えが頭をかすめました。休日でもなんでもない普通の日の仕事が終わる時刻でしたから、彼女は必ず家に寄るはずだと思ったのです。こんな時刻に訪問したら気を悪くされるかしら。ともかく私は衝動を抑えきれず、彼女の家の方に車の向きを変え、このチャンスを逃がすまいと心に決めました。道路の縁石のところに車を止めてあの傾きかけた家に通じる道に目をやると、いつも空っぽの自動車置場には、はたしてその日も車はありませんでした。それで、エンジンを切って待つことにしました。25分が過ぎて、そろそろ家に帰ってくる子供たちが、私がいけないことやいつもの夕飯の匂いがしないことを不審に思うに違いないと思いつつも、私は車の中で何度も座り直しながらとにかく待っていました。

それから落ち着かない気持ちで待つことさらに15分、もうあきらめて帰ろうとしたちょうどその時、旧式のくたびれたフォルクスワーゲンが草に埋もれた道を通り、あのいつも空っぽの自動車置場に止まりました。私は早速車から降りてポーチのところまで歩き、車からふたりの子供を降ろして家の鍵を捜しているジュディに、自己紹介をしました。そしてようやく会えた喜びを伝えました。彼女は素っ気ない態度でしたが、親しげな私に負けて狭い居間に通して下さいました。

私は初め、もっぱら幼い息子さんと娘さんの相手をし、保育園から持って帰った絵を見せてもらったり、包帯の下のすり傷の

ことを詳しく聞かされたりしました。それでジュディの気持ちはほぐれ、私というものを知ってもらうことができたようでした。子供たちに関心を寄せている私に対して彼女はだんだん心を開き、やがて遠慮がちに、父親のいない生活の悪影響から子供たちを守ろうとする日頃の努力のあれこれを話して下さるようになりました。彼女の御主人は「個人の自由」なるものを求めて、妻子を残し、蒸発したのだそうです。ジュディは生き抜く決意を固め、給料の良くない職に就きながら、歯科衛生士の資格を目指して夜間学校に通っていました。子供たちを近所のキリスト教の学校に行かせ、御自分も日曜日の礼拝に出ていらっしやいました。教会に行ってさえいれば、どの教会でもかまわないとおっしゃっていました。

この訪問は短い時間でしたが、彼女との間につながりができました。そして、彼女の休日にまたお訪ねする約束をしました。玄関の所で、私はまっすぐ彼女の目を見つめ、福音が確かなことについて証をし、その美しい教えを聞く機会を大切なお子さんたちから取り上げないで欲しいとお願いしました。彼女の目には涙があふれました。私はジュディの手を固く握っておいとましました。

私はジュディについてもっと何かしたかったのですが、彼女のホームティーチャーに連絡を取ろうと思いました。そこで割り当て表を持っている人を捜すのに3カ所電話をしたのですがわかりません。そして結局はワード部の幹部書記に話すのが一番よいと考え、電話をしたのですが不在でした。そ

の晩、何回も電話をかけてみましたがとうとう通じず、あきらめました。

それから2日後の夜にまた電話をしてみると、彼女の記録は教会に置いてきたそうで、2、3日中に書記室に電話をして欲しいということでした。でも、言われた通りに電話をかけるとだれも出ず、私はホームティーチャーに連絡するのが本当に大切なのだろうかと思うようになりました。

私がついにジュディと約束を取ったことを家庭訪問の同僚に話すと、同僚は本当に喜びました。そして新たな希望に燃えて、彼女のお宅に向かったのです。ジュディは私たちを待ちかねていて、私たちが焼いて持っていったまだ温かいクッキーを喜んで受け取って下さいました。私たちは初めのうちは和気あいあいと差し障りのない話をしていましたが、ジュディは子供たちについての不安や心配、自分が抱えている大きな劣等感や経済的な苦しさを打ち明けてくれるようになりました。話を伺うことで幾らかの慰めにはなったでしょうが、私はもっと何かをしなければいけないと思いました。帰る時、玄関口で彼女のホームティーチャーがどなたか尋ねると、ワード部に移ってきてからひとりも訪問していないことがわかりました。私は驚きました。半年も割り当てをしないとはどういうことでしょう。

日曜日の朝、私は幹部書記にお話ししようと思い、早めに教会へ行きました。調べてみると、レイ・グリアーという熱心な長老がジュディの担当ホームティーチャーでした。私ははたと困りましたが、教会の中で

彼を捜すとちょうど2週間の休暇中だということでした。2マイルを行こうとすると何と多くの障害にぶつかることか、今さらながら驚きましたが、ここであきらめてはいけないと心を引きしめたのです。私はその決意を胸に、帰宅された日にレイ兄弟と会いました。私が次々に質問すると、彼は弱りきった様子で私を見ていらっしゃいました。彼はジュディ・カーンズ姉妹のことも御自分が彼女のホームティーチャーだということも知りませんでした。どこかで手違いがあったのだとすぐにわかりました。私はレイ兄弟にジュディの電話番号と彼女のことを書いたメモを渡し、事態が急を要することを話しました。彼は私の働きを感謝して下さい、何とかしようというお気持ちのようでした。

それから1、2週間のうちに、2マイル目は奇跡の1マイルになりました。神の定められた計画が機能を発揮したことによる奇跡、神権を尊ぶ熱心な兄弟たちによる奇跡、関心を寄せた姉妹たちによる奇跡でした。確実に手順が踏まれ、主が示された計画に人々が進んで従うのを見て胸が躍りました。私が属していたのは、間違いなく神の教会だったのです。

レイ兄弟は自分で訪問しただけでなく、その週は夕食と家庭の夕べにジュディを招待しました。子供たち同士がすぐ仲良くなり、ジュディも、日曜学校へ車でお送りするというレイ姉妹の好意を喜んで下さいました。ジュディは遠慮がちでしたが、子供たちが乗り気で、最後には承知して下さいました。

彼女は再び教会へ戻ったことで、回復された福音の重要さを改めて知りました。帰る前に監督と会い、扶助協会の会長と話をし、初等協会の役員が保育園へお子さんたちを迎えに行つて初等協会に出席させることが決まりました。ジュディが間もなく歯科衛生士の資格を取れると知った監督は、職のことを心配して、ワード部雇用ディレクターに彼女を雇ってくれそうな歯科医を捜すように依頼しました。それで資格を取得した時には、すでに3件の面接が待っていました。彼女はその中から、一番給与の高い職場を選びました。

それから数週間後、扶助協会会長がジュディの家を訪ね、扶助協会の夜の部で歯の手入れについて教えて欲しいとお願いしました。ジュディは承諾し、同じような問題を持つ働く姉妹たちと親しくなることができました。そしてそれを契機に、彼女は扶助協会に出席するようになりました。それから監督は、今こそ教会の召しを与える時期であると判断しました。子供日曜学校が時間的に一番都合が良かったらしく、ジュディはすぐに子供たちの素晴らしい教師になりました。

その後、ワード部の区域内で借家をあちこち捜していたレイ・グリアー兄弟が、格好な家を見つけました。長老たちが荷物を運んでいる間に、夜の扶助協会の姉妹たちが棚に紙を敷き、日曜学校の役員は引越しパーティーの食事作りをしました。ジュディは大勢の人たちにとってなくてはならない人、ワード部に欠かせない人となったのです。

断食証会でジュディが初めて証に立った時、礼拝堂はいつにも増してシーンとしていました。彼女は主が自分と一緒に歩いて下さること、福音によって平安が得られ、恐れや劣等感が克服されたことが今はよくわかりますと、謙遜に証をしました。大勢の人たちに対する愛を語る彼女の目から、感謝の涙がとめどなく流れました。彼女が話し終えた時には、ほとんどの人がハンカチを手にして、主のみこころの成就を共に喜んだのでした。私は涙を拭いながら、ジュディをそうまで変えたこれまでのいきさつに感慨を覚えました。信じられないようですが、その発端は、訪問教師の責任を2マイル行こうとしたささやかな働きだったのです。

あの日私ははっきり知りました。神様の仕事をしていて自分がたとえ取るに足らない者のように思われても、私たちには神様の偉大な計画を動かし、人生を変えたり築いたりする素晴らしい力を発揮し、生きた奉仕の場を提供するなど、偉大な能力が秘められているのです。ただ、その途方もなく大きな可能性は、私たちがきっかけを作り、2マイル目を奇跡の1マイルにした時に初めて、開かれてゆくのです。

☆

☆



ちい とも
小さなお友だちへ



とくべつ か てい ゆう
特別な家庭の夕べ

しちじゅうにんだいいちていじんかいかいじん
 七十人第一定員会会員

エフ・バートン・ハワード ちようろう
 F・バートン・ハワード長老

な ねんもまえ、わたしはステーキ部
 ちよう 長をしていたころ、キンボール
 だいかんちよう すうじつかん りようこう
 大管長と数日間、いっしょに旅行す

ることができました。それは、メキ
 シコ・シティーでしゅうかい 集会有り、きようかい 教会
 のとち 土地をいっしょに見に行くように



言われたときのことで。日曜日にちようびの午後ごご、キンボール大管長だいかんちようはメキシコにきました。

月曜日げつようびはほとんど一日中、土地を見てまわりました。大管長しやうがっは、小学校しょうがっこうをほう問し、教会員きやうかいいんと話し、新しい住宅地あたらを見学してメキシコの教会きやうかいの発展はつてんの計画けいかくをたてました。やっと夕方ゆうがたになって、わたしたちはホテルにもどりました。そのとき、大管長はだれかのうちの家庭かていの夕べゆうに出ることができかどうか、たずねました。わたしが「できます」と答こたえると、「では、家庭の夕べをいつも開ひらいていて、子どもがたくさんいる家族かぞくをいくつかあげてみてください」と、言いました。わたしがあげた中なかから大管長はひとつの家族をえらびました。そして、今夜こんや出席しゅっせきさせてもらえるように電話でんわをしたのんでほしいと、言いました。大管長のえらんだ家族はわたしも前まえに行いったことがあり、よく知しっている家族でした。そこでわたしは、その家の母親いへに電話をかけました。

「もしもし姉妹しまい、バートン・ハワードです。お元気げんきですか。」

「はい、元気です。」

「今いま、大管長といっしょにホテルにいるんです。」

「大管長ですって。」

「ええ、予言者よげんしやのキンボール大管長です。」

「予言者がメキシコにいらっしゃるんですか。」

「はい、ところで今夜、大管長があなたのうちの家庭の夕べにうかがってもよろしいでしょうか。」

「今夜ですって。」

「はい、今夜です。」

しばらく返事へんじがありませんでした。

「もしもし、姉妹、聞こえますか。」

「ええ。それは本当ほんとうですか。」

「はい。今わたしはキンボール大管長のへやにいます。時間があき次第家庭の夕べにうかがってもよろしいでしょうか。7時ころになりますか、おそいですか。」

「いいえ、たいてい6時半はんか7時ころに始めますから。」

「大管長は食事しょくじをすませて行きますので心配しんぱいされなくてもけっこうです。ふだんと同じ家庭の夕べをなさるようにしてください。おもてなしはけっこうですよ。」

「ええ」

「それでは、のちほど。」

「ええ、お待ちしています。」

キンボール大管長は小さな子どもたちのために、おかしを買いしました。6時半ごろ父親がホテルに、わたしたちをむかえにやって来ました。こうして、わたしたちは家庭の夕べに向かったのです。とちゅう、大管長は花屋で母親のためにバラの花を買って行きました。わたしたちが家に着くと、子どもたちはみんな一番いい服を着て出むかえてくれました。そして、家に案内してくれました。プログラムはもう準備されていました。開会の歌は「家庭の中に」。10才の子どもがピアノをひき、一番年上の子どもが指揮をしました。14才の女の子が家庭の夕べの司会をし、キンボール大管長をかんげいし、活動を発表し、レッスンを母親にたのみました。

母親は井戸に水をくみに来たサマリヤの女の話をして、「生ける水」を与えることの意味を6人の子どもたちに教えました。そしてレッスンからわかったことをひとりびとりにたずねました。6才の女の子の答えが一番よかったです。それは、

教会員でない人に福音を教えることが、「生ける水」を与える最もよい方法だと答えたからです。レッスンは終わると14才の子どもは、まるでいつものこのように、「さて、キンボール大管長のお話を聞きましょう」と、言いました。

大管長は若いころのことや、家族のことを話し、家庭の夕べの開き方についてもいくつか質問しました。そのとき、大管長はピアノをひいてもよいかどうかたずねて、「神の子です」や「たえず頼り」をひきました。わたしたちはピアノのまわりをとりかこみました。その後、飲み物とクッキーが出されました。これはモルモンでよく見られる光景です。母親は、子どもたちが家具の上にバラバラとクッキーをこぼすのを見ると、もう居間で食べてはいけなと注意しました。キンボール大管長は10才の子どもといっしょに、「感謝を神にささげん」をひきました。

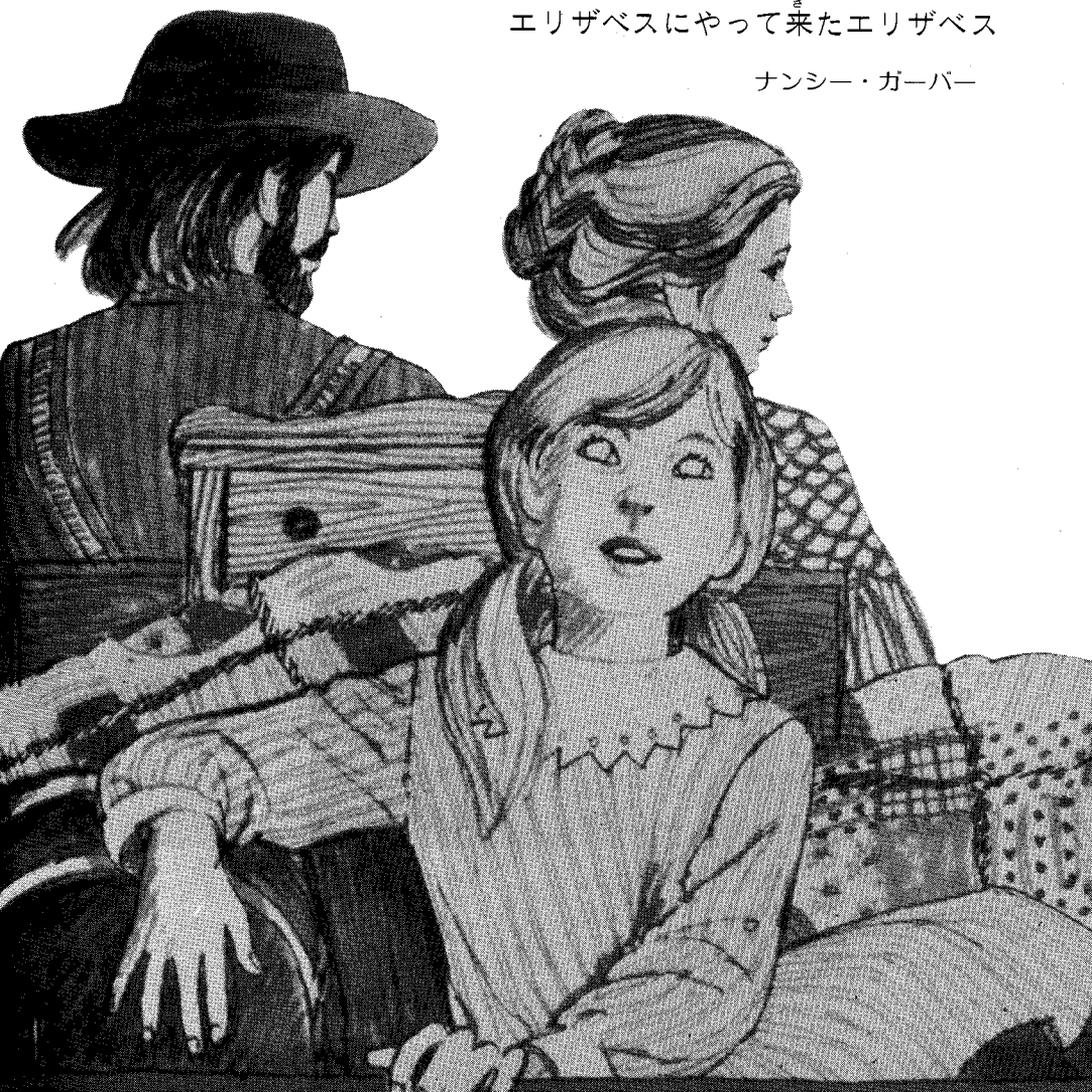
とうとう時間になり、わたしたちは車に乗って、思い出深い家庭の夕べをあとにしてホテルに帰って行きました。

ケイトはエリザベスという町に住んでおり、この日、たん生日のプレゼントをさがそうと、ある店に行きました。あすのことを考えるとむねがドキドキします。弟のエドワードのたん生日なのです。

ケイトは、エドワードのプレゼントを買うために、何か月も働いてお金をためました。そしてきょう、ケイトとお父さんは荷馬車にのって町にやって来たのです。ケイトは、小さな火花を出しポッポーと汽を

エリザベスにやって来たエリザベス

ナンシー・ガーバー



ならして走る小さなきかん車しやを買うことにしました。

ケイトとお父さんが店から出て来ると、見なれない家族かぞくを乗せた荷馬車にばまがやって来るのが見えました。男の人がたずなを取り、その横よこに女の人おんながすわっています。そして女の子が、荷馬車にばまにしっかりつかまって、まるで空高く何かを見つめているように首くびをかしげていました。

女の子はケイトと同おなじくらいとしの年としのようでした。お父さんはかるくうなずくと、ケイトの手を取って、荷馬車にばまの方ほうへ歩いて行きました。にっこりして、「ステイーブ・シモンソンです。この子はむすめのケイトです」と、あいさつしました。

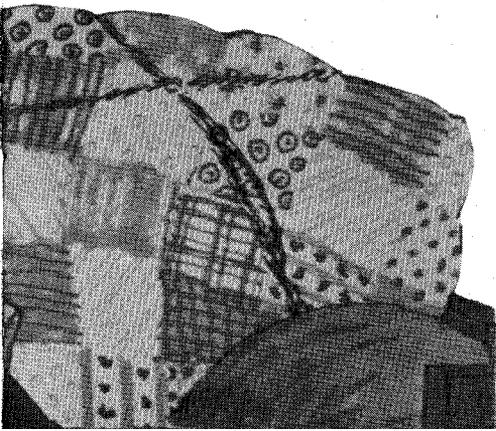
男おとこの人はあく手てすると、「わたしは、ジョン・マイナーです。そして、つまのミリー、むすめのエリザベスで

す」と、しょうかいしました。おくさんはあいさつすると、店はなに入いって行いきました。

「ねえ。いいところに来たわね。この町まちの名なもエリザベスっていうのよ。」女の子はにっこりしました。でも、まるでなにかを見上げているように頭あたまを上うへに向むけています。

ケイトも見上げましたが、青あおい空そらしか見えません。もうこれ以上いじょうなにも言うことを思おもいつきません。お父さんとマイナーさんが、土地とちや家かちく、天気てんきのことについてしばらく話はなしている間あいだ、ふたりはだまっています。それから、お父さんとマイナーさんは不動産屋ふどうさんやの方ほうへ歩いて行ってしまいました。

さて、なにか話さなければとケイトは考えましたが、エリザベスは話したそうには見えません。とうとう、ケイトは「遠とほくから来たの」と、たずねてみました。でも、「ミズーリ州のセントルイスからよ」と、空を見上げたままエリザベスは答こたえるのです。ケイトは少し気きを悪わるくし、手を後ろうしろにまわして、「エリザベス、どうしてわたしを見ないの」と、言いいました。



「なにか悪いことしたかしら。」

「したかしらって。」

「わたし目が見えないの。」

「えっ。」ケイトはなんと答えてよいかわかりませんでした。馬の足音、木のゆかを歩く人びとの足音が聞こえ、自分の心ぞうの音まで聞こえてきました。ケイトはやさしく、「ごめんなさい」と、言いました。

「あなたが悪いんじゃないわ。」エリザベスが言いました。「外に出ると顔を上げるのよ。太陽は気持ちがいいの。雨の日も顔を上げるのよ。雨が降っていることを顔で感じられるから。でも、太陽が一番すきよ。」

ケイトのお父さんが荷馬車のところにもどってきて、帰る用意ができたよとよびました。エリザベスが「さよなら」を言うと、ケイトは手をふりました。でも、エリザベスには見えないことに気がつくと、ケイトも「さよなら」と言いました。帰り道、ケイトはエリザベスのことを、お父さんに話しました。

次の日、学校で、ボルドウィン先生が、「わたしたちのクラスに新しい人が入って来ました。エリザベスです。目が見えません」と、発表する

と、みんなおしゃべりをやめて、エリザベスの方をふり返って見ました。

「エリザベスは9才です。生まれたときから見えないので、自分のことは自分でできますが、ここは新しい場所ですからなにごどこにあるかわかりません。しばらくの間はだれかが助けてあげなければいけませんね。」そうしてボルドウィン先生は、ケイトの方を見ました。「ケイト、あなたと同じ年だし、学年も同じだから、きょうはあなたがエリザベスを見てあげてちょうだい。どこになにかあるか教えてあげてね。」

ケイトは立ち上がると、エリザベスの手を取って席に案内しました。その後、かいだん、ストーブ、まど、コートかけ、くつばこがどこにあるか教え、席につれて帰りました。

やっと下校時間になりました。ケイトは一日中少しもエリザベスのそばをはなれられず、とともつかれました。こんな毎日でないようにねがいました。だって、走ったり、遊んだり、楽しいことができない女の子にしばらくたくなかったからです。ケイトは帰り道、ひとりになってほっとしました。うでをぶらぶらさせ、

自由な気持ちになってぐるぐると2、3回まわしてみました。そして、かけ出しました。エドワードのたん生日なのです。パーティーにおくれたくありません。

エドワードがプレゼントを開いて、きかん車をよろこんでくれたときには、ケイトはすっかりエリザベスやつまらなかった一日のことをわすれていました。エドワードの友だちのザカリーが来ていて、目かくしをしてロバにピンでしっぽをつけるゲームをしました。目かくしをしたあと、ぐるぐるっとまわされてロバの方に歩いて行きます。でもザカリーは、耳の所にしっぽをつけてしまいました。ケイトは今度は自分にやらせると言いました。

「わたしならもっとじょうずにできるわよ。」お父さんが目かくしをし、ケイトをぐるぐるまわしました。ケイトは手をさし出し進みました。でも、なにかにぶつかるのではないかと心配です。まっ暗やみで、おそろしさがこみあげてきました。そのとき、エリザベスのことを思い出しました。ケイトはつまずいてなにかにぶつかりました。すぐに目かくしを

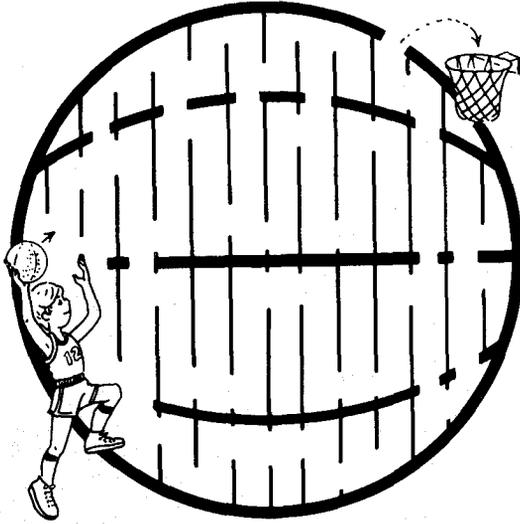
とると、戸だなの前にいました。ふり返ると大好きなみんなが見えました。

よく朝、ケイトは学校でエリザベスを待ちました。そしてしっかりエリザベスの手をにぎり校舎の方へ歩いて行きました。



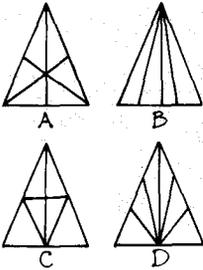


おもちゃばこ



めいろ

めいろとびを通してバスケットにボールを入れて下さい。



さんかくけい
三角形はいくつかな？

さんかくけい
三角形がいちばん多いのはどれでしょう



「あれっ、ことりはどこにいったんだろう。」

活 発で証の強い家族には良いホームティーチャーは必要ないと思う人もいるが、それは本当だろうか。特に監督やステークス部長、その他の神権指導者の家族についてはどうだろうか。

私はこのことについて少し考えてみたいと思う。結婚して間もない頃、私は4軒の家族のホームティーチャーに召された。そ

の中の一軒は、父親が教会に来るがまだ霊的に改宗していなかった。もう一軒の家族は、夫が教会の会員ではなく、結婚して間もない妻と教会へ行こうとはしなかった。

3軒目の家族は、夫が元ステークス部長会の一員、妻がステークス初等協会会長をそれぞれ務めたにもかかわらず、ふたりとも教会には不活発だった。4軒目のスミス一家

どの家族にも 良いホームティーチャーが 必要である

ジョン・D・ウエッテン



はとても活発な明るい家族であり、父親は高等評議員、母親はワード部扶助協会の会長であった。

私はホームティーチングの同僚と担当家族について話し合い、当面の間は、励ましとフェローシップを明らかに必要としている3家族を中心に行動することにした。スミス家は月に一度短い訪問をして親睦を深めていけば心配ないと思った。

しかし、それぞれの家族を一度訪問し、さらに有能なホームティーチャーになるにはどうしたらよいか祈ってみると、どの家族も優秀なホームティーチャーとその援助を必要としており、スミス一家も他の家族と同じように祈りのこもった思いやりと愛を求めていることが分かってきた。

最初の一年間、私たちはスミス家と親密な関係を築こうと努力した。毎月訪問するたびに、3人の子供たちのために時間を取り、初等協会やスカウト、アロン神権、学校などでどのような成長を遂げているか知るようになった。そしてスミス家の息子がイーグルスカウト賞を受けた時など、私はそ

の授賞式で話をするよう頼まれたほどである。

時には子供たちと一緒にアイスクリームを買いに出かけたこともある。ワード部のパーティーでは、スミス家の一人一人と交際を深めた。

フレンドシップは両方の家族から行なわれた。たとえば、私の家の最初の赤ちゃんが生まれた時、だれよりも喜んでくれたのはスミス家の人々だった。しかも、スミス姉妹は私の妻の出産を祝ってパーティーまで開いてくれた。

ある日、スミス兄弟から電話があって、近いうちに手術を受けるつもりであることを知らされた。医者が腫瘍を発見したのである。私は彼のために癒しの儀式を行なった。

手術は成功して腫瘍は取り除かれた。私たちの責任は、父親が健康を回復するまで家族を励ますことだと思った。

1年後に、別の腫瘍が現われた。再びスミス一家は励ましと助けを必要とした。そして今回も腫瘍は取り除かれた。



しかし、数カ月後にまたしても再発した。私たちは、スミス兄弟のために祝福を宣言した時、みたまの慰めの力を何度も感じて、心から感謝した。私たちホームティーチャーは、家族が一致した信仰を持って主のみこころに従うことが大切であると話した。

この最後の腫瘍は広範囲にわたっていたので医者も手の施しようがなかった。私たちはそれを聞いて落胆した。しかし、スミス兄弟が助かるという望みは捨てなかった。

私は仕事の帰りにしばしば彼の家に立ち寄った。そのころは鎮痛剤も効果がなく、激痛に苦しむ彼から祝福を求められることが多かった。当時の経験は、私の人生で最も印象に残るものになった。病床に伏している友人を励ますために、私は毎日ふさわしい生活をして靈感を受けられるよう努力した。

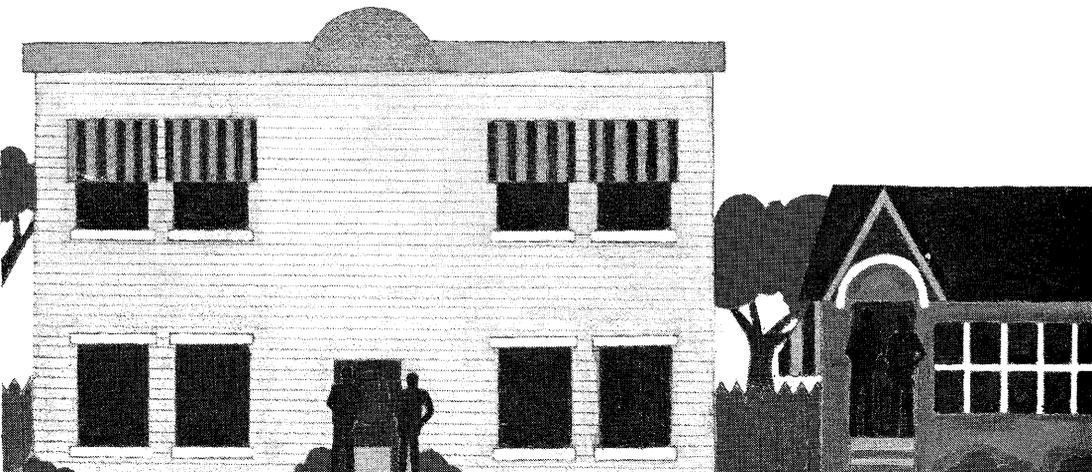
ある土曜日の朝、私は妻と一緒に買い物に出かけようとした時に、こう言った。「スミス兄弟の容態を見に行く必要があると感じる。」私たちはその前日の夜に彼を訪問して、異常がないのを確かめていた。

「わかったわ。訪問する必要があるとあなたが感じるのなら、そうしましょう。」

彼は前日とまったく同じ様子でベッドに横たわっていた。その一週間に、際立った体力の衰えは見られなかった。私は戸惑ってしまった。なぜ訪問する必要があると感じたのだろうか。そこで私は、信仰を強める出来事について話そうと考えた。子供たちはベッドの周囲に集まって私の話には耳を傾けた。そしてその場には、主のみたまが満ちていた。ところが、私が話をしている最中に、姉妹の腕にもたれかかっていたスミス兄弟が突然に息を引き取ったのである。

私の妻は子供たちを別の部屋に連れて行き、少しの間話をして、彼らの疑問に答えた。妻は子供たちに、父親が生涯彼らの力の源になるだろうということ、またいつの日か、救い主の贖罪と復活のゆえに、父親とうるわしい再会を果たせるであろうということを教えた。

私は医者と監督、それに葬儀屋に電話した。その日は一日中、スミス姉妹のために奔走した。



葬儀は月曜日に行なわれた。監督がその手配をしていると、スミス姉妹が、夫は詳細にわたって葬儀の計画を立てていたと告げた。それによれば、ホームティーチャーである私が霊的な話をすることになっていた。

私は戸惑ってしまった。スミス兄弟の近所にはステーキ部の指導者や教会の役員が大勢住んでいる。しかし、彼らではなく私が葬儀の席で話すように頼まれたのである。そのプログラムには、私がホームティーチャーであることを明記するようになっていた。

葬儀がすむと、私たちは家族が立ち直れるようにできる限りのことをした。ワード部の中で会計士をしている会員に依頼して、家族の予算を組み、家計を立て直す手伝いをしてもらった。また大工として働いている会員に、家を維持するために必要な修理を見積もってもらった。それから、ワード部の神権定員会の会員がやって来て、家庭が通常の状態に戻れるように必要な仕事をこなした。

私たちはスミス姉妹が様々な働き口について検討できるように助けた。そして、子供たちとも一層親密になるように努力した。

父親がまだ霊的な改宗をしていない家族は、とにかく教会に集っていた。家族が密接な愛の絆で結ばれたので、お互いにうとんじることなく理解し合い、受け入れるようになっていたからである。

2軒目の家族の教会員でない夫には、青少年のファイアサイドとミュニシャルで警察官の生活について話してもらうことにした。彼は、青少年が警察官に対して好感を

持てるように話す責任を大喜びで引き受けた。ある時には、自分のオートバイでミュニシャルにやって来て、その機能について説明したこともあった。一年後にこの夫婦が引っ越した時、彼は結婚した当時よりも妻の属する教会に対して好感を持つようになっていた。

私たちが担当した3番目の夫婦は、ワード部の会員になじめずに不活発になっていた。そこで、私たちは彼らの友人であり、彼らに関心を持っていることを理解してもらおうと努めた。そして、子供を教えるという姉妹の特別な才能が教会で必要とされていることを伝えた。彼女は日曜学校に集うようになり、やがて日曜学校教師の召しを受けた。私の妻はワード部のクリスマス・パーティー用のクッキーを作るように頼まれた時、この夫婦に手伝ってもらい、そのあとで私たちのゲストとしてパーティーに招待した。後に彼らは引っ越して新しいワード部に移ったが、二度と不活発になることなく教会に出席している。

私たちは何か特別なことをしたわけではなく、だれにでもできることをしたまでである。しかし、ホームティーチャーとしての昔の出来事を思い返すたびに、あの時に得た強い証が再び心に湧きあがってくる。

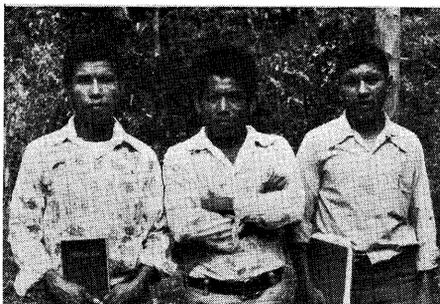
それは、ホームティーチングの重要性、ホームティーチャーが担当家族に抱く深い愛、そして人に奉仕することによりもたらされる喜びについての証である。特に私にとってうれしいことは、すべての人が、たとえその人が活発な教会員であっても、良いホームティーチャーを必要としていることを早い時期に知ったことである。

グアテマラの伝道談

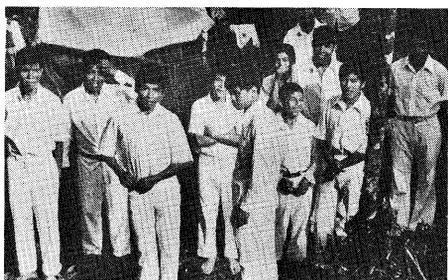
リン・ティルトン
コーデル・アンダーセン



1



3



2



4

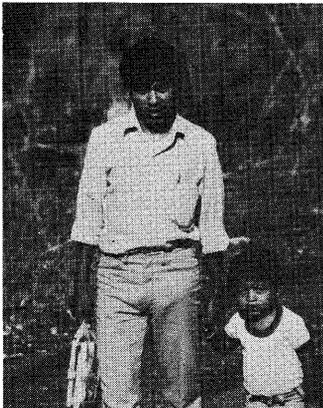
1 1977年12月17日、最初のパプテスマがあった後、証会で話すプリンハースト長老。出席者は64名、その中の34名が証を述べた。

2 チュラックで初めてパプテスマを受けた11名の青年

3 チュラックのグループ初代会長会、左からロドルフォ・チョク、会長のミグエル・チョク、書記のレジナルド・チョク

4 チュラックで初めて誕生した20名の成人教会員、子供たちを加え、教会員数は37名になった。

5



6



5 教会へ向かうレジナルド・チョコ兄弟と子息。チョコ兄弟は初代グループ会長会の一員であり、長老に聖任された最初の人々のひとりでもあり、現在は日曜学校会長の責任にある。

6 礼拝堂の2階部分のはりに屋根板を止めているアンダーセン地方部長

4 輪駆動の小型トラックが、チュラックに通じる曲がりくねった山道を慎重に走っていました。チュラックというのは、グアテマラの中央高地の山間に開けたポロチック盆地の中の農園です。と突然、黒雲からこぼれるように雨が降り出しました。トラックは協同組合に変わったという8500ヘクタールほどの農園の中央集会所を目指していましたが、その風防ガラスを雨が激しくたたいています。

運転しているのはグアテマラ・コバン地方部のコーデル・アンダーセン部長。助手席に座っているのはケチュア・インディアンへの伝道に召されたカリフォルニア出身のプリンハースト長老とコスタリカ出身のリオ・ラゾ長老です。ほろの下には、アンダーセン長老の長女で17歳のジュリーと、プロボ高校の同級生のレスリー・アン・ナイト、アン・ガードナーというふたりのお嬢さんが乗っていました。そして4人目は、73歳の改宗者、グスタボ・ラミレス兄弟でした。ケチュア・インディアンのラミレス兄弟は巡回歯科医です。

一行がようやく中央集会所の広い前庭に

着いて、どしゃ降りの雨から逃れる場所を捜した時は、平日の金曜日でも暮れかかっていました。数人の労働者がプラスチックの板切れを頭にかざし、客人を出迎えに庭を横切って走ってきました。彼らはアンダーセン地方部長とふたりの宣教師を、夕食と宿泊の用意のできた農園事務所へ案内しました。

その間に、農園の売店のひさしの下に駆け込んだラミレス兄弟は、大勢の労働者たちに虫歯があったら抜いてあげると話しました。そしてモルモン経を紹介し、興味がある人のために夜、集会が開かれることを教えました。

会場の手はずが整った頃には雨も上がりました。農園の人がふたりで箱を抱えてきて、椅子になるように縦に置きました。巡回歯科医のラミレス兄弟が鞆を取り出し、用具をトラックのほろに沿って並べ、一人目の患者が箱の椅子に腰かけました。ラミレス兄弟は麻酔薬の入った瓶を取り、注射器に薬をつめました。

抜歯を終えると、訪問者たちは携帯用発電機とスライド・プロジェクターを下ろしてきました。そして器具や、電球のついた

延長コードを、集会が行なわれる予定の倉庫へ運び入れ、それからアンダーセン地方部長と連れ立って、近所の家を何軒か訪ねました。

その夜は175人が集まりました。協同組合の指導者のひとりで、所属の教会の平信徒の中心人物である人が、「明日の夜はお帰りのが残念です。もっと大勢集まるでしょうに」と言って、出席者の少ないことを謝りました。

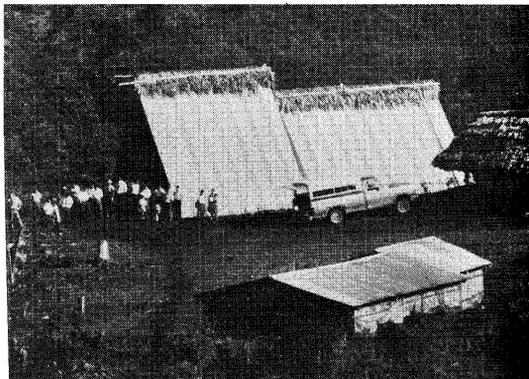
集会が始まる前にアンダーセン地方部長が発電機を動かしました。1個の電球の明かりの下で、ジュリーとレスリーとアンと訪問者たちが開会の歌を歌いました。

歌が終わりラミレス兄弟がインディアン語で祈った後、アンダーセン地方部長がスペイン語でモルモン経の由来を説明し、それをラミレス兄弟が通訳しました。その後プリンハースト長老が175人に向けてケチュア語で話をし、それが終わるとリオ・ラゾ長老とふたりで「わたしは神の子」「子供の歌」B-76)をケチュア語で歌いました。

会が終わった後、立ち去る人はごく少数でした。人々はあちこちで輪を作り、ケチュア語しか話せない人はプリンハースト長老とラミレス兄弟に話しかけ、スペイン語がわかる人はリオ・ラゾ長老とアンダーセン地方部長に質問をしました。

これは、農園理事会の招きでチュラック農園を2度目に訪れた時の様子です。

そもそも事の始まりは、1977年4月にペラバスのサン・クリストバルに派遣されたオスカー・デルガード長老が、サン・クリストバルに近いバルパライソ農園の30名ほどの求道者に教えるように、監督長老から依頼されたことでした。デルガード長老と同僚は、そこにいる間にひとつの有効な伝



7 チュラック支部支部長会：ラファエル・マーズ——書記、ホセ・チョク——第一副支部長、アルフレド・チョク——支部長、セバスチャン・チョク——第二副支部長

8 5日後、建物は未完成ながら使用可能になった。右手には、教室として使われる草ぶき屋根の建物第1号が一部完成している。これ以後草ぶき屋根の教室が次々作られた。

道方法を発見しました。モルモン経がマヤ文明に古くから伝わる失われた記録であることを話して、求道者の興味をそそるという方法です。

長老たちはその後間もなく、政府任命の

農園支配人に会いにサン・クリストバルまで5時間をかけてやってきた、チュラック農園協同組合理事の7人のインディアンに会いました。その支配人は、偶然にもサン・クリストバルの宣教師宅の家主でした。

6人の立派なインディアンに感じるところのあった宣教師たちは、伝道するつもりで彼らを部屋に招きました。6人は全員がモルモン経を自分の先祖の書物、先祖の宗教として受け入れ、それぞれ1冊ずつをチュラックに持ち帰りました。

6名の理事はチュラックの教会の平信徒の指導者でもあったため、次の日曜日の礼拝にモルモン経を使用しました。そして宣教師を農園に呼んだのです。

チュラックへの最初の伝道に訪れたのは、アンダーセン地方部長、デルガード長老、プリンハースト長老、それにインディアンの通訳者として、タンチ村の教会員の青年指導者でバルパライソで改宗したミグエル・チャブ兄弟でした。

4輪駆動のトラックによるこの遠隔地までの5時間の旅は、初め思ったより手間取り、到着は日没後になってしまいました。ですから、彼らが本当に来てくれるのかどうか、だれも知りませんでした。でも口づてに近所の家々に彼らが到着したというニュースが伝わり、60人が集会に出席しました。一行は手厚いもてなしを受け、なるべく早くまた訪問して欲しいと頼まれました。

175人が出席した2度目の訪問の時のことは先に述べましたが、群衆の代表者であったミグエル・チョコはその時このように言いました。「今聞いたことが気に入りましたし、信じます。私らの先祖のこと、先祖の宗教のこと、どうしたらもっと良い生活ができるかということをもたまたま教えに戻って

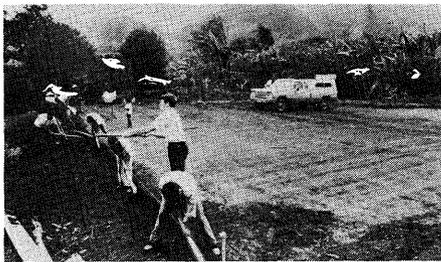
きて欲しいです。」

3回目の訪問はそれから2週間後でした。土曜日の午後1時に成人を対象としたモルモン経の勉強会を予定して準備はしていましたが、この時は、会の前に重病の家を診療に回る時間を見込んで早めに出かけました。午後2時の会には105名が出席して、最前列には6名の指導者がそれぞれモルモン経を手にして座りました。その夜は、300人が出席して映画を見ました。

アンダーセン地方部長は後に、翌日曜日のことは容易に忘れられるものではないと報告しています。「初めに、私たちの朝食を用意して下さったインディアン姉妹の祝福を頼まれました。それから協同組長で伝道師の長をしておられるホセ・チョコがやって来て、私と一緒にカトリック教会で開く集会のプログラムを作りました。自分たちのやり方では回復された先祖の宗教に合わない部分があるからというのです。集会の半分は彼らがいいつも通りに取りしきり、あとの残りを私たちに任せることで了解が得られました。

礼拝堂は300人から400人ものインディアンの人たちであふれるほどでした。6人の信徒の指導者が順番に説教し、後の時間が私たちに任されました。同行している73歳のケチュア・インディアンのラミレス兄弟と、バルパライソで改宗したポコムチ第1号の信者ミグエル・マックス、それにプリンハースト長老が話をしました。閉会に、「わたしは神の子」(子供の歌、B-76)を歌いました。

それからチュラックの指導者たちは、いそいそとして、「モルモンの礼拝堂」を建てるために選んだという美しい場所へ私たちを案内して下さいました。



9



10



11

- 9 肩を並べ、教会用地の地ならしと土台の穴掘りに励む宣教師と教会員
- 10 寸法に切られた丸木がバルパライソから運ばれ、ベンチに組み立てられた。
- 11 未完成ながら、チュラックの教会の急速な発展に応じて集会所兼本部として使用された礼拝堂

その後数カ月間、専任宣教師は週末に都合のつく限りチュラックを訪れました。そして1977年12月、最初の37人がバプテスマを受けました。夫婦が7組と子供や若者でした。

しかし、チュラックの発展はたやすいものではありませんでした。組織ができて間もなく、以前からの集会所の使用が禁止されたため、戸外か、悪天候の時には順番に教会員の家で集会を行なわなければなりませんでした。また、専任宣教師の訪問が限られていたため、改宗活動はほとんど若い人たちに頼る状態でした。それでも初期の改宗者が他の人を教えに出かけて、1、2週間の間に4家族、11人がさらにバプテスマを受けました。そしてその週末は、12歳以上で神権をまだ受けていなかった男性教会員全員が聖任され、神権者の総数は16人になりました。そのうちのふたりが地方部宣教師に任命されました。またその同じ日に、リーダーとその補助（支部長会と同じようなもの）、それに日曜学校の会長会が組織されました。

その後間もなくの集会で、初めて赤ん坊と子供たち19人が祝福を受けました。予定されていたよりひとり少なかったのですが、そのひとは赤痢と栄養失調でその週の内に死亡したのです。アンダーセン地方部長はこう報告しました。「6歳以下のインディアン乳幼児の死亡率は50パーセントです。その数字が私たちから子供を取り上げようと迫る蛇のように目前に立ちはだかりました。私たちはそれまで、バプテスマの面接とか、誕生の記録作成、幼児の祝福、グループの組織とかに専心するあまり、新教会員の物的福祉を怠っていたのです。

それからすぐ、新会員を対象に、福祉活

動全般にわたる勉強会が計画され、次いでそこで学んだ救命のための知識を実行に移す計画ができました。

4名の人が週末のチュラック訪問のため、地方部福祉活動宣教師に召されましたが、これは地域の教会員としてはグアテマラで初めて召された人たちでした。扶助協会の姉妹たちの指導にコバン出身の19歳のジュディス・オバリー姉妹、初等協会担当はバルパライソ支部のクリスチナ・アンダーセン姉妹、農業を専門とする前述の通訳者、21歳のミグエル・チャブ、それに歯学と医学を学んで建築計画も手伝うディエゴ・カント兄弟です。グスタボ・ラミレス兄弟も都合のつく限り手伝うことに決めました。

まず着手しなければならないことのひとつが集会所の建設です。伝道部長から単室形式の建物の建築許可が下り、支配人から農園内での建築工事が認可されました。バルパライソのコーデル・アンダーセンが経営する「インディアン育成協会」実験農場学校からとグアテマラ・シティーから、ト

ラック2台分の資材が早速運び込まれました。バルパライソからは、チュラックの教会員の建築を手伝いに、若者たちの労働班が同乗してきました。そして5日間にわたる重労働の末に、一部完成した建物で最初の集会が開かれたのです。その後、時間と資金に合わせて建物は徐々に仕上がっていきました。

チュラックに住む新しい末日聖徒たちの物心両面にわたる進歩は、家を整え、向上させるという点で、村人の良い模範になりました。健康に役立つ良い習慣も模範でした。アンダーセン地方部長は、「まだまだしなければならないことはたくさんありますが、出足は順調です。」と言っています。

チュラックは、1978年前半のこうした一連の出来事に端を発して、つい先頃まで教会の発展が不可能と見られていたへき地にもかかわらず、恐らくグアテマラの全支部中一番の速さで、なお発展を続けています。チュラックの初年度における大きな催しは、1978年9月24日に伝道部長の管理で開かれた特別大会でした。会場には208名が集ま

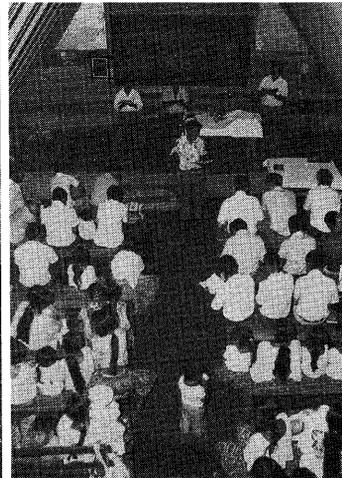
12

12 チュラックで初めて任命された地方部宣教師：サングラスとネクタイを専任宣教師から借りておどけてみせるラファエル・マーズ長老(左)とホセ・チョク長老



13

13 2階から見た礼拝堂内部



りましたが、その内のだれひとり、次に起こることを予測できませんでした。閉会の祈りが終わって人々が頭を上げ、礼拝堂から出始めた時、別のインディアン集団が礼拝堂に向かって近づいて来たのです。教会員がプロテスタントの3教派に属する友人たちを招待していたせいでした。その人数は、何と252名でした。帰ろうとしていた人たちも礼拝堂に戻って、すぐに大会の第2部が始められ、集会を管理する人たちに加え、各教派の代表者が簡単に話をしました。この大会の総出席者数は460名でした。

さらに最も意義ある出来事は、1979年4月、教会の独立支部がここに組織されたことです。教会員数130人、その内長老14人を含む50人が神権者で、アルフレッド・チョク兄弟が初代支部長として召されました。

チュラックにおける主のみ業の進展ぶりが刺激となって、グアテマラのこの地域（ポロチック盆地一帯）に初めて専任宣教師が派遣され、現在では5カ所に10名の宣教師がいます。しかし、発展はまだまだこれか

らです。チュラックの成功に励まされた別の地域では、次のようなことを行なっています。(1)プロテスタントの教派に属する地方のインディアンとしては国内最大の規模を誇る団体に、月1回の訪問や映画の上映などを12回以上にわたって続け、平均600人から800人の出席がある。(2)へき地のインディアンの団体と接触して、大勢の病気の子供の祝福を要請された。(3)いろいろな集会で、本の読める人々にモルモン経を何箱も贈っている。しかし、しなければならぬことはまだたくさんあります。

オスカー・デルガド長老は、1977年7月初旬のあの運命的とも言える日にチュラック協同組合のインディアンの理事たちとたまたま出会ったことが、このような大きな結果を生むとは想像もしなかったことでしょう。また、彼らへの働きかけが契機となって、単に改宗への道を開くだけでなく、福祉活動を実践する最善の方法が見いだされるとは、決して思わなかったに違いありません。

14



14 礼拝堂が満員の最近の大会風景

15 スナップ写真を撮る姉妹たち



15

あかり

ウェス・ステイブソン



私が16歳、弟のスコットが14歳の時、私たちの家族はサウジアラビアに引っ越しました。ところが、そこには14歳から18歳までの生徒が入れる英語学校がなく、私と弟は隣国のバーレンにある寄宿学校に入学しました。寮の中にモルモンは私たちふたりしかいませんでした。私と弟は毎週教会に出席し、たばこや酒はのまず、ロッカーの戸に女の子の写真をはったりもしないのでたいていの学生は私たちがモルモンであることを疑わなかったようです。私はそれで十分だと思っていました。人が私の信じていることについて尋ねれば答えるし、もしそうでなければそれでよいと考えていたからです。だれも好きこのんで笑い者になろうという人はいないはずです。私はあかりを柵の下に置くことはしませんでした。しかし同時に燭台の上に置くこともしなかったのです。(マタイ5：14, 15参照)

ところが移ってきて2年目に周囲の様子が変わってきました。スコットが米国史のクラスでブリガム・ヤングについて研究発表するように割り当てられたのです。私はスコットを助けて聖徒たちの迫害、西部への移動、ソルトレーク盆地の開拓、ヤング大管長の業績、さらにそれらが今日の世界にどのような影響を及ぼしているかについて情報を集めました。弟によい研究発表をして欲しかったのはもちろんですが、それよりもほかの人が私たちの「風変わりな信条」を物笑いの種にしないかと心配だったからです。

私はクラスの後、学校で弟に会うことができなくて、研究発表の成果を聞くことができませんでした。すると放課後、食堂にいる私のところに、週末に飲みに出掛けたり、夜にこっそり寮を抜け出す連中が近づ

いてきました。

「やあ、ウェス、君がモルモンというのは本当かい。」

「思った通り、やってきたな。」私はそう思いました。恐らく連中は私にタバナクル合唱団の歌でも歌わせるつもりだろうと私は考えていました。「ああ、そうだよ。」私は答えました。

ところが彼らは口々に「それはすばらしい」と言い、自分たちも何か信じられるものが欲しいと思っているし、私がなぜそんなに真面目一方でだれとでもうまくやっていけるか不思議でたまらないと言うのです。彼らの話に耳を傾けているうちに、私も驚きました。今までそのような言葉が返ってくるとは夢にも思っていなかったからです。

それから私と弟は教会についてよく話すようになりました。友達もよく私たちのところに来るようになりました。学校の先生も「モルモン経」や「奇しきみわざ」を読んでいます。そのうち何人かの友達が一緒に教会に来るようになりました。これまで無神論者で通していた私の親友も教会で証を述べるようになりました。その時はまだだれもバプテスマを受けていませんでしたが、その中の何人かが後に改宗したと聞いています。

私はバーレンにいる間、いろいろなことを見たり、学んだりしましたが、これはその中でも最も素晴らしい教訓でした。世の人は福音がもたらす喜びを探し求めているのだということがはっきりわかりました。あかりを柵の下に置いていたのではなんにもなりません。すべての会員は宣教師です。むしろあかりを燭台の上に置くのが私たちの責任ではないでしょうか。



心を落ちつけて祈る

エイプリル・ホーマン

カ ナダのアルバータ州マグラスからカルガリーまではかなりの道のりです。その日はハイウェーに激しく打ちつける雨のせいかな、いつまで経っても目的地に近づいているという実感が湧きませんでした。私たちは皆疲れていました。母と祖母が前の席で話しているほかは、全員がバンの後部で休んでいました。私自身も外は土砂降りだわと思いつつ、そのまま寝入ってしまいました。しばらくして、私は激しい痛みで目を覚ましました。それもそのはず、車が何かに激しく衝突した反動で、サイドドアのところの狭いすき間に体を押し込まれてしまっていたのです。足はすりむけ、血が流れていました。呼吸も次第に速くなってきます。つぶれかけた車の中には、祖母が倒れているほかはだれもいないようです。

ただうめき声が聞こえてくるだけでした。やがて、だれかが私をそのすき間から引き出してくれました。祖母は、私が側に寄ると、かすかな声でこう言いました。「心配しないで。大丈夫だよ。」

13歳になる弟は、後ろのドアから外に投げ出されていました。その弟が言うには、私はひどく興奮していたそうです。弟はその私の腕をつかみ、激しく揺りました。そして大声でわめき散らしていた私に、心を落ちつけて祈るように言いました。弟は腕の骨と鎖骨を折っていたにもかかわらず、よろめきながらハイウェーに戻り、1台の車を止めました。

車は母が運転していたのですが、道路が雨でぬれていたためにハイドロプレーニング現象を起こし、ハンドルが全くきかなか

ったのです。

道路を突っ切った車は、土手を滑り落ち、排水溝にぶつかってはね上がりました。そして泥の中に突っ込んで数回転し、農場に通じる坂道の上でようやく元通りの形になって止まったのです。母はひどい傷でした。肋骨が折れ、顔は見るも無残に傷ついていました。その上、つぶれた車体にはさまれ、人手を借りなくては動けない状態でした。これでは落ちつけと言う方が無理です。

私たちは休暇を利用してお婆の新しい家へ行くことと遠出してきたので、近くで知り合いの人はだれもいません。後でわかったことですが、そこはカルガリーから35マイル（56キロ）ほど離れた小さな町、バルカンの近くでした。私たちの車が滑り落ちて止まった場所は、ハイウェイから目につきにくい所でした。そのような中で、心を落ち着けて祈るようにと言った弟の言葉が心の奥に焼きついて離れません。私はともすると気が動転してどうしたらいいのかわからなくなりそうでしたが、そのたびに一生懸命に祈り、平静を取り戻すことができました。

弟がハイウェイで止めた車には、ふたりの女性が乗っていました。弟から事故のことを聞いたふたりは、無線機を積んだ車を止めてくれました。救急車が到着したのは、それから2、3分経ってからのことでした。幸いバルカンにも小さな救急病院があり、私たちはそこですぐに手当てを受けることができました。

病院には患者専用の電話が1台あったので、母はそこまで連れて行ってもらい、ソルトレーク・シティにいる父に電話をかけました。次にカルガリーのおじに連絡を取りました。おじは知らせを受けるとすぐに駆けつけてくれました。母はおじに会うや否や、長老たちを捜してきて欲しいと頼

みました。ところがおじは受付に向かう途中で、5、60代のふたりの男性に出会ったのです。

「モルモン教会の長老を捜していらっしゃるではありませんか。」彼らはそう問いかけてきました。おじは「ええ、そうです」と答えると、ふたりを病室に案内しました。彼らが言うには、通りがかりに事故にあった車のナンバープレートを見たら「ユタ」とあったので、病院に行って尋ねてみた方がよいという気持ちになったということでした。ふたりは大祭司で、私の弟、いところ、母、そして私に祝福を施して帰って行きました。私たちはふたりのことを新聞に投稿しました。あわただしい中で、名前を聞くのを忘れてしまったからです。

私たちは、祖母が病院に運ばれて来る前にすでに息を引き取っていたことを知りました。しかし私は、あの時の祖母の確信に満ちた言葉から、祖母には霊界で祖父と再会する準備ができていて、きっと平安な気持ちでこの世を去ったに違いないと思いました。

私はこの事故からもうひとつの大切な教訓を得ました。それは主が私たちの祈りを聞き、それに応えて下さるということです。主は助けを必要としている人々のもとにふさわしい神権者をお遣わしになります。私たちはかなりの重傷を負いましたが、全員快復しました。あの時に神権の祝福を受けたことは、私たちにとって大きな慰めでした。みたまの勧めに従って病院に来て、私たちのために時間を割いて下さった方の方に心から感謝しています。この感謝の念はいつまでも消えることはありません。また、祈った時にすべては良しと告げる平安を心に得たことも、生涯忘れることはできないでしょう。

東京神殿，一般公開され

◇ ◇

東京神殿の一般公開についてのニュース（9月13日付）は先月の東京神殿特集号でも少し紹介したが、今回は特別公開の記念式典や訪問者の東京神殿に対する印象などを織りまぜた詳しい模様を皆様にお伝えしたい。



◇ ◇

テープカットを前に（前列左より菊地良彦長老、デビッド・M・ケネディー兄弟）

秋晴れのもと、午前9時より500名近い人々が参列する中、特別公開の記念式典がおそかに催された。参列者の中には政治家、各国大使、実業家、大学教授、銀行家、報道関係者、建築家、写真家、宗教家など社会のあらゆる分野で活躍する人々の姿が見られた。まず、開会の祈りが捧げられた後、以下の人々によるあいさつが続いた。

最初は大管長会特使のデビッド・M・ケネディー兄弟。ケネディー兄弟はこの日に寄せる感銘深い祝辞とスペンサー・W・キンボール大管長より託されたメッセージを述べた。次にドウェイン・N・アンダーセン神殿長。アンダーセン神殿長は日本における教会の簡単な歴史や最近の著しいその発展ぶり、ならびに東京神殿の特徴などに

ついて説明した。そして最後に日本・韓国地域代表役員の菊地良彦長老のあいさつ。菊地長老は東京神殿の完成と式典を迎えることができた喜び、さらには天父とスペンサー・W・キンボール大管長よりいただいたこの大いなる祝福に対する感謝の気持ちを述べた。

これらのあいさつの間には、聖歌隊によるコーラスも披露され、式典に彩りを添えた。そして、神殿入口前に用意された紅白のテープに菊地長老、ケネディー兄弟、アンダーセン神殿長がはさみを入れ、式典を閉じた。

一方、訪問者の中には著名な方々も数多く見えた。松下幸之助氏もそのひとりである。松下氏は今年85歳、世界に名だたる松

下電器(株)の会長であり、日本を代表する偉大な実業家でもある。多忙なスケジュールの合間をぬって神殿を訪れた松下氏は、東京神殿の美しさに非常に感動したと語っておられた。そして出迎えの菊地長老の手を固く握りしめながら何度もお祝いの言葉を繰り返された。

11月1日に催された大阪地域大会の会場、松下電器(株)枚方体育館は、松下氏の厚意によって確保したものである。

他に著名な方として、日本の宗教界に大きな力を持つ立正佼成会の会長、庭野日敬氏も見えた。庭野氏は夫人とご子息を伴い、東京神殿の完成祝いに美しい大きな花輪をお贈り下さった。庭野氏はかつてジョセフ・

ローカル・ニュース

フィールディング・スミス、ハロルド・B・リーの両大管長に会われた経験もあり、ご子息は昨年春、ソルトレーク・シティーの教会管理本部ビルを訪問されている。

報道関係者が目立ったのもこの日の特色である。日本テレビをはじめ、フジ、NHK、東京12チャンネルなどのテレビ局、読売、産経などの新聞社から代表者が相次いで訪れた。その中のひとり、日本テレビ社長小林与三次氏は、東京神殿の簡素な美しさには強く心をひかれたと語られた。日本テレビではその日夕方、東京神殿の公開の模様をニュースで紹介した。

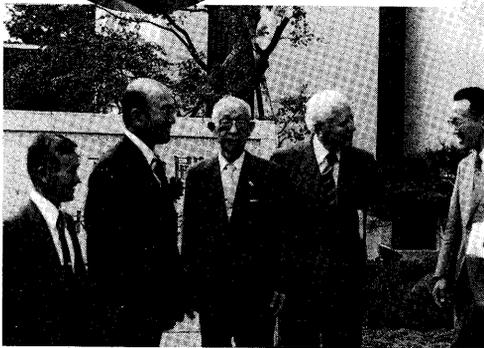
なお、当日の訪問者は650名(うち教会員106名)という状況だった。



◀日本テレビ社長
小林与三次氏



▲地区代表の安芸宏長老(左)の案内によって神殿に入られる立正佼成会の庭野日敬会長(右)中央は庭野氏のご子息。



◀神殿入口にて松下電器(株)会長の松下幸之助氏を迎える左より安芸宏長老、菊地良彦長老、大管長会特使のデビッド・M・ケネディー兄弟。

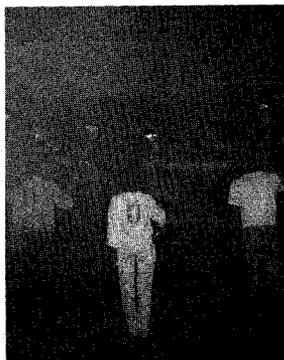
（楽しい思い出を残して）

8月6日から9日までの4日間、岐阜県ひるがの高原にて催されたグリーンカンファレンス。全国からの若人約1200名が集って繰り広げられたこの祭典は、天候にも恵まれ、盛況であった。

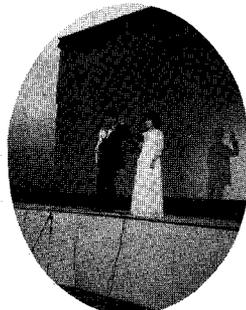
若人の情熱と歓喜に満ちあふれた催し物からは、数多くの忘れられない思い出が参加者一人一人の胸に残った。その様子を伝えるいくつかのスナップを紹介しよう。



バスハイク



キャンプファイア



開会式



ダンスパーティー



カルチャアの夕べ



全国からの参加者

教会教育プログラムに組まれているセミナー。現在、全国でその対象となる12歳から18歳までの教会員、およそ1500人が受講している。

新旧約聖書、モルモン経など、聖典を通してのそのレッスンは、具体的、かつ密度の濃い内容で受講生の証を強める大きな助けとなっている。今までも多くの兄弟姉妹からそれに対する喜びの証を寄せていただいたが、今回また、大きな喜びを得たひとりの姉妹の証を紹介したい。

札幌第3ワード部の山吹佳奈子姉妹。彼女はその年代にあって誰もが経験する受験地獄とセミナー学習を見事に両立させた。実に啓発させられる証である。



セミナーの卒業と 大学合格

日本札幌ステークス部
第3ワード部
山吹 佳奈子

私がこの教会を初めて訪れたのは、中学2年の夏、大管長が札幌の地を訪れた時でした。姉に誘われてのことでした。私はそれまで他の教会に集っておりましたが、この教会に出席した時、自分が行っていた教会とは全く違う印象を受けました。最も強く感じたことは、みんながひとつになっているということでした。それが不思議でたまりませんでした。なぜなら、私の集っていた教会には一致ということがなかったか

らです。みんなが適当に集い、話を聞いて帰る、ただそれだけのことであり、一人一人に「参画する」という気持ちがなかったからです。

二度目に教会へ出席したのは、その年の11月3日、第3付属支部の収穫祭の日でした。これも姉に誘われて来たのでした。建物の古さには少々驚かされましたが、内容の素晴らしさは、言葉では表わせない程でした。姉は、教会へ行く前、「天使みたいな人

ばかりいて、自分が恥ずかしくなるくらいだよ」と話してくれましたが、まさにその通りでした。私は、今まで行っていた教会で、こんなに霊的で家族的な雰囲気を感じたことはありませんでした。私は、次の安息日からこの教会に集い始めました。

教会は私の第一印象通りの所でした。宣教師は、福音についてほとんど知識のない私に一つ一つ丁寧に教えて下さったので、自分がいったい何を求めていたかがだんだんわかるようになってきました。最初は、祈りの方法を教えて下さいました。私は本当に驚きました。今まで教会に集って祈り方を教えてもらったことなど一度もなかったのです。この教会の子供はみんな祈ることが出来ます。小さな子の祈りなど、他の教会には見られないことなのです。私は、毎日モルモン経を欠かさず読んで祈りました。日ごとに人生の目的や自分にとって、今何が大切かということがわかってきて、よく成長することができました。

しかし、私には「証」というものがありませんでした。ただ知識を増やし、良い雰囲気の教会であるということだけで集っていたのです。

4月になって、若い女性のプログラムが始まりました。生徒は私一人です。私が行かない時でも教師はずっと私一人を待っていてくれました。不思議でなりません。教師はどうしてこんなに一生懸命なんだろう、行くかどうかわからない私をどうして長い間待つことができるのだらうと思いました。そんな頃、知り合ったひとりの姉妹の模範によって、若い女性の教師がどうしてこんなにも熱心なのかということがだんだんわかるようになりました。彼女は私に福音の素晴らしさを教えてくれました。

また、召しを果たすことによって受ける祝福がどんなに大きなものであるかを知らせてくれました。私は彼女の模範に従おうと思い、熱心に教会に集い、祈りました。小さな証が得られました。私は心からバプテスマを受けたいと思いました。前にも受けようと思って両親に話したことはあったのですが、その時は反対されました。しかし、今回は、小さいながらも証が持てたのです。再び両親にチャレンジしました。父からは、「信仰というものは、一日や二日で得られるものではない。何年もかかるものだ。学生は、宗教よりも、学業が本分だ」と言われ、きっぱり断われました。私はとても悲しかったのですが心を落ち着けて考えてみると、父の言うことは、もっともだと思います。そしてその通りにがんばろうと決心したのです。

そして無事高校に入学し、軽くなった気持ちで教会に通いました。再度両親にバプテスマについて尋ねました。答えは以前と同じでした。「これから勉強もむずかしくするのに、教会になど行くな」というのです。私が教会に熱心になったのを、大変いやがっていました。それからは、セミナーの勉強をかくれてやったり、教会に行く前に口論することもしばしばありました。でも私が行くことをやめないの、教会に行くのをやめさせることだけは、あきらめたようでした。しかし相変わらずバプテスマは、反対でした。

やがて私は高三になり、また受験の年を迎えました。どう考えても受験が終わるまで、両親はバプテスマを許してくれそうにありません。また、受験が終わっても許してくれるかどうかわかりませんでした。私が受験に失敗したら、教会のせいとされる

のは、目に見えていました。とにかくそれだけは違うということを証明しなくてはなりません。私は、大学合格がバプテスマを受ける必要条件だと思いました。そして、合格できれば、必ず受けられるという確信を持ちました。私は教会のことより勉強に力を入れるようになりました。そのためか、セミナーの方は、ずいぶん遅れてしまいました。その時は、セミナーよりも、受験勉強をやってバプテスマを受けることの方が大切だと思いました。しかし、セミナーをやらないということは、私にとって不安のたねでした。福音が自分から遠ざかるような気がしました。私は、セミナーで得た証がいちばん多かったのですが、証がなくなってしまうような気さえました。そしてとうとう13冊もためこんでしまったのです。

私は受験後にセミナーをやれば良いと思っていたのですが、それでは自分の果たすべき責任を果たしていないのではないかと思いました。勉強をしても、セミナーをする時間は、十分にあったのですから……。私は大学受験前にセミナーを終えようと決めました。入試は3月4日でしたが、2月25日からセミナーを毎日二冊ずつやりました。13冊あったのがみるみる減っていき、入試2日前の3月2日の安息日には、全てを終了し、提出することができました。私の心は晴れやかでした。これで試験がダメなら自分の実力でもあるし、今はとにかく私のやるべきことはすべてやったと思い、すっかり割り切ることができました。自信は全然なかったのですが、幸いにも合格することができました。それからバプテスマの許しを受けようと両親に話

をしました。私は、「近いうちに必ずバプテスマを受けられる」という強い証を得ていましたので、絶対に許してもらえると確信していました。しかし、父に頭から反対されました。私はびっくりして言葉もなかったのです。母は、私がどんなにバプテスマを受けたいか、またどんな気持ちで勉強していたのか、よく知っていました。そのことを父に話してくれました。3人で長い間、話した結果、やっと許しができました。その一週間後の安息日、3月23日に私はバプテスマを受け、教会員となりました。あれだけ反対していたのに、バプテスマ会には、父以外の家族全員が出席してくれました。その日は、私の幸福を、いっぺんに集約したような日でした。若い女性卒業、第3ワード部の若い女性が責任をすべて担当してくれたバプテスマ会、セミナー4年間卒業、本当に素晴らしい日でした。

今、冷静になって考えてみると、両親は私のことを心から案じてバプテスマを反対したということがよくわかります。私は、そんな両親に心から感謝しています。両親の反対がなかったら、私は教会に集いたいという気持ちがこれほど強くはならなかったと思います。また私に多くの模範と愛を示してくれた多くの兄弟姉妹に心から感謝しています。これらの人々の助けがなかったら、私はこれほど強い証を持つことはできなかったでしょう。

私は、この福音が真実であり、この教会は神権のある唯一まことの教会であり、神は生きていらっしゃる、いつも私たちを見ていて、誠心誠意で求めれば、必ず助けを与えて下さることを、イエス・キリストの御名により心から証致します。アーメン。

訂正

9月号p.171, 1段目の8行目と9行目の間に以下の文が入ります。お詫びして訂正いたします。

「……の集会のほかに、月曜日を除く週日の1日……」

